

# 浄土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和十三年十一月廿日印刷納本 昭和十三年十二月一日發行

第四卷 第十二號

十二月號



# ◇仕奉後銃・久持忍堅◇

## ◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院  
慰問

# 白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた  
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります。

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

## ◎一冊の淨土・一生の歡喜

品製研理

# 健康の安全地帯

朝夕一球宛の

『理研ヴィタミン』で……

風邪をひかなくなる  
結核を防ぐ力がつく

見よ！この力價！

理研ヴィタミンは純粹のヴィタミ  
ンAとDを服みよいグロビニール球  
に包んだ強力製品です。一球中に七  
七〇〇國際單位、すなはち鶏卵二十  
五箇分のヴィタミンAを含有し朝夕一球宛の常用で斷然抵抗力がつき、  
呼吸器が強化され、風邪をひかなくなり結核も豫防される。國民體位の  
向上に理想的栄養劑として推賞される。



理研ヴィタミン

(包裝)

四十球入 百球入  
五百球入 千球入

婦人子供用小粒製品

五拾球入 一、三〇  
百球入 二、五〇



店商置玉 社會式株 販大京東 店理代總

表紙・扉繪

鈴木 金平

虛 榮 浮 薄 牧野元次郎

(一五)

蓮 華 乃 ち 開 く 佐藤賢順 (一六)

謠曲「上人流」に就いて 松本龜松 (一四)

隨筆 親 切 金子 和 (一三)

或る農夫と白い犬 篠原文雄 (一四)

從軍記者物語 二橋 新 (一五)

隨筆 軍 刀 一瀬直行 (一六)

信 仰 相 談 中村 辨 康 (一三)

佛教と社會を語る座談會 立石鉞一、中村辨康その他 (一〇)

現地だより 貴いことである 白崎 嚴 成 (一四)





婦人淨土

欣びの今日此頃……………橋本樂榮(五)

女と着物……………高瀬磯(五)

戰線餘話 信仰の救ひ……………吉原自覺(四)

冬空……………吉田絃二郎(三)

小説 捕物競争……………吉田初太郎(四)

支那女流詩選……………呂萍雲(三) 映畫物語「鶯」……………(五)

從軍僧……………(四) ピラミッドの一石……………(三)

歌壇……………與謝野晶子選(七)

俳壇……………太田耳動子選(六)

日常勤行式解説 めざめいきむつむ……………中村辨康(四)

鑽仰運動ニュース……………(三)

編輯部だより……………(五)

◆淨土 第四卷 第十二號 十二月號 目次◆

中村 辨康 著

# 法然上人の信仰生活

四六判 一三〇頁總ふり假名

定價 三十錢  
送料 六錢

上人が萬人と共に悩み求められた信仰求道の生活を軸としそれを回る時代の種々相を描いて何人にも納得の行くやうに親切丁寧に説かれてある。一讀信仰の真髓にふれよ！

中村 辨康 著

# 信仰 讀本

四六版 八〇頁總ふり假名

定價 二十錢  
送料 三錢

邪教跋扈し、人心また惑亂するの時、一道の光明燦然として信仰の正道を指し示す。萬人のための宗教、淨土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

藤井 實應 著

# 法然上人法語抄

菊半截クローズ装一四四頁總ふり假名

定價 三十錢  
送料 六錢

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。浩瀚なる上人御遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句、これぞ生活の根底である。

佐藤 春夫 著

# 法然上人別傳 掬水譚

特製ノート型、天金・十二ボ総ふり假名、三百頁、美麗函入

定價 四圓五十錢  
送料 二十二錢

大毎、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放菴畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

# 淨土

十二月號

三途へかへるべき事を  
する身をだにも  
すてがたければ  
かへりみはぐくむぞかし。  
まして往生ほどの  
大事をはげみて  
念佛申さん身をば  
いかにもくくみたくべし。

法語抄一六八



金

死と同じ連続にある生物學的な現象だから、生以上のものは死以上のものと言つても同じことである。生を單に横に連續する意欲的な事實と考へるならば、その意味での生を超えた部面、從つて死をも超えた部面が、この現實的な生を截斷してゐる所があるに相違ない。

死が忌まはしきもの、厭はしきものとのみ考へられて、覗いてはならぬもの、觸れてはならぬものとされてゐるのは、死が感覺生活、意欲生活の終局とのみ考へられてゐるからであらう。死はそのやうに單なる生物學的な現實的な生の終結と考へられてはならない。

死を考へることは、そこから逆に生を考へることである。生から死へと順序立つて考を進めてゆくのではなくて、横の生活が横の生活を截斷するところ、死以上の立場に立つて再び生を見直すことなのである。

横の生活の縮圖とも言ふべきアパートメントに住む人達が、個人的な、思ひ思ひの氣儘な生活をしてゐるのに比べると、農村の人達は、兎に角、横の生活に觸れることが多い。都會人の處帯には、佛壇も位牌もないのが多いけれども、農村では銘々の家の、

先祖傳來の田や畑の一角には、先祖の墓が設けられてゐるのをよく見受ける。

私は昨夜、箱根近くの函南村畑毛温泉へ泊つて、今朝早く百舌鳥のけたゝましく啼く聲に起された。そして桔梗色に晴れた空の下を、二時間近くも散歩したが、或る村では田畑の間の小高い丘の上に幾つかの古墳が苔蒸してゐるのを見た。その後には幾抱へもある松や杉の老木が亭々と天を摩して、幾世代の長い間、次々にこゝに迎へられた人々に語りかけてゐる。古墳のまはりは帯の目も鮮かなほどに、奇麗に掃き清められて、道端で手折つたのであらう、野菊や薄が竹筒の花立てに入れて供へられてゐる。かういふ風景は、決して珍らしいものではなく、農村へ行けば何處でも見られるであらう。今は東京市に編入されてゐるが、私の寺の近くにさへ七八年前までは、自分の家の畑に先祖の墓地を持つてゐる人が少からずあつた程であるから。

こゝに鋤鋤を取る人々は明け暮れに先祖を思ひ、先祖に看守られてゐる心強さを感じるであらう。遠い親達から譲られた田や畑や家屋敷は自分獨りのものではない。自分達も亦これを守つて間違ひなく子孫の手へと譲らなければならない。かうして、こゝでは、生以前と生以後とに固く結び着いた生活が、日々に繰り擲げ

られてゐる。こゝでは、全く平坦な、自分達だけの横の生活は、精神的な密度を持った縦の生活と交叉してゐる。

けれども考へてみると人間は心と體との兩方を必ず備へなければ存在できないといふことも、嚴然とした事實である。石や木と違つて、又、神や佛とも違つて、純粹に物質的な存在も純粹に精神的な存在も、人間には望むことはできない。人間の生存の爲には、どうしても物質的な、身體的な基礎が必要なのである。私が先に、現實的な生への愛着や熱意を冷笑したり、現世的な欲望や要求の意義を見失つたりしてはいけない、と述べたのも、かやうな理由からである。然し兎に角、人間が身體的なものに生存の基礎を置いてゐる限りは、それに伴ふ諸々の條件に拘束されることも亦止むを得ない。それ故、この現實の人間には、眞に純粹に精神的な生活とか——今の場合で言へば、眞に生や死を超えた生活とか——はとうてい望むことはできない。そこで、眞に自由な、把はれない生活といふ望みは、理想の生活として、生物學的な死の彼方に、懸けられるのである。それは宗教的な至上の目的であり、その成就こそ宗教人の等しく願ひ求めるところである。

私は大體そんなやうに先生にお答をした。これ以上書かなくとも、もうそれだけで結論は解つてゐる筈である。その宗教的な至上の目的、全く物に把はれない生活が成就した時には、その表兆として蓮華が開くと昔から言ひ傳へられてゐる。佛教發祥の地では蓮華は第一の名花である。佛陀が成道せられた時には、「天地が六種に震動して」その喜びを共にしたといふから、最高の精神的理想が達成せられた時に、蓮の華が開くといふのも、誠に適しいであらう。眞夏の曉明に、パツと蓮の華の開くのをみると、その清らかに躍り高い姿に、さもあらうかと思はれる。

お經には「蓮華乃ち開く」とか「蓮華方に開く」とか同様に記して、人間の抱き得る最も高い目的の成就した喜びを表してゐる。

私の寺の庭では、この夏も幾朝か蓮の華が見事に開いた。お經には其の「大さ車輪のごとし」とあつて、少し大袈裟に聞えるが、然しさうでも言はなくては濟まないやうな氣持にもなる。

(函南村畑毛にて)

x

x

x

# 佛敎と社會を語る座談會

## 出席者

大同生命庶務課長 立石 鉸一  
 鴻池信託東京支店長代理 大 鹽 一 見  
 加 藤 德 衛  
 美容大學院主 橋 本 樂 榮

本會側 中 村 辨 康

佐 藤 賢 順  
 道 瀬 幸 雄

兼ねて法然上人の末裔立石鉸一氏ら實業家を中心とした座談會を持きたいとの希望があつたが、十月五日品川願行寺でその第一回が催されたがこれはその座談の一部を採つたものです。

中村「この頃よく方々で講演を信仰へは入りにくい。どういふもしますが、文科法科系統の人は、のですか、工理科系統の人は割理屈が多くて仲々信仰へは入りに合に素直に受入れてくれます—佐藤「言葉の問題などもあるで

せう。佛敎語には複雑で一寸理解できないものが多いから」

## 佛敎語に就いて

立石「佛敎の言葉で普通一般に使はれてゐる言葉が随分あるやうですね。そしてその意味がよく解らずに使つてゐる」

中村「そうです。新聞などを一寸見てもすぐ百位ひの佛敎語は見付かります」

立石「例へば冥加なぞと言ふ言葉もそうでせう。私共はよく冥加なことをしたなぞと云ひますが、一體冥加とはどう云ふ意味なんですか？」

中村「何事によらず、我々の受けてゐるものには、直接目には見えないが色々な恩寵が集つてゐる。凡てのものが、社會、國家の寵によつて成立してゐる、そして我々が、これを受けとるやうになつてゐるのですから、これを有難いと思つて受取るのが宗教的な態度で、これを冥加と云ふのでせう。目に見えぬ力が加はつてゐる意味ですね」

大鹽「因果なぞと云ふことも云ひますが」

中村「因果と云ふのは一般には縦の關係だけのやうに考へてゐますが、佛敎では、この因と果の縦

の關係だけでは理論がなりた、ないものとしてゐます。例へば、  
 十に二と云ふ定量的な關係だけではこれは科學の立場です。因果と云ふだけでは縦の關係だけが、釋尊はこの因果を更に別の因果で破つてゐる。つまり簡単に云へばこれに横の關係を加へてゐます。世の中には二と二を加へて四にならない場合の方が實際には多いので更にその時の環境、周圍なその條件が加つて來て、始めて正しい結果が出て來るのです。  
 一般に道德の基礎が因果的であるときめてしまつてゐるから、動きが取れなくなつてゐる。一度悪いことをすれば悪人でもう救はる道が無いと云ふやうなものでなく、周圍の色々な條件を整理して行けば、そこから抜け出ると云ふ積極的な態度がなければいけない

ので、佛教では決して因果と云ふものにとらはれてゐません。」  
 大鹽「よく縁とか縁起とか云ふことを聞きますが、どう云ふことを云ふのでせうか」

### 縁とは何か

中村「佛教で云ふ縁には興力縁、無力縁、逆縁とあり、それを全部總括したものととして増上縁と云ふのがあります。これらの縁が集つて、凡てのことが成立つのでこの縁に就いてはインダラ網と云ふ話があります。これは帝釋天宮に懸る寶の網で、その網には一つ一つ珠がかゝつてゐて、その一つの珠に他の無數の珠の影が映つてゐて、その影がまた他の珠に映ると云ふ具合に一つの珠の中に無數の影が相映じてゐる。縁と云ふものもこの珠の影の様に重々無盡に

相即相入してゐると云ふことを物語つてゐるのだと思ひますか。

これに就いては私が以前上海に参りました時に、居士林と云ふ處に行つたことがあります。それは王以と云ふ人が會長で、まづ淺草の觀音様の様に澤山な人が集つて來ます。そこに座禪をする部屋、念佛をする部屋などがあつて、その部屋の廊下の向ふに鏡の間と云ふのがある。それは四方鏡の張つた部屋で、そこに遣入ると自分の姿が四方八方に映つて、その映つた姿がまた映ると云つた具合に自分が見えない様な遠方までずつと重なり合つて見えます。縁と云ふものの姿を見せたものでありませう。

これとは意味が少し違ひますが印度の話で共鳴と云ふ話があります。印度のある王様が壁畫を描せ

やうとして二人の畫工に依頼した。一人の畫工は一所懸命に美しい精密な畫を描いてゐるのに、その向ふ側の壁を受持つた畫工は唯一心になつて壁を磨いてゐるだけである。する中に一方の畫工の壁畫が出来上つたので、王様が御覽になると實に美事なものだが、他の畫工は壁を磨いてゐるばかりだから、王様が怒つて、何故お前は畫を描かないのだと云ふと、「いや立派に描いた」と云ふので、その壁を見ると、成程向ふ側の壁の繪が、その鏡のやうに磨いた鏡に映つてゐた。と云ふ話です。これは木蓮と舍利弗の化身だつたと云ふ話ですが、己の心を一心に磨いておれば、相手の心はそれにじかにつて來ると云ふ意味でせう。人に共鳴するためには心を磨いておかなければならぬと云ふ」

# 佛ぶつ教けうと社しゃ會かいを語かたる座ざ談だん會かい

## 出席者

大同生命庶務課長 立石 鉸一  
鴻池信託東京支店長代理 大 鹽 一 見  
加 藤 德 衛  
美容大學院主 橋 本 樂 榮

本會側 中 村 辨 康

佐 藤 賢 順  
道 瀬 幸 雄

兼ねて法然上人の末裔立石鉸一氏ら實業家を中心とした座談會を持ちたいとの希望があつたが、十月五日品川順行寺でその第一回が開催されたがこれはその座談の一部を採つたものです。

中村「この頃よく方々で講演を信仰へは入りにくい。どういふもしますが、文科法科系統の人は、理屈が多くて仲々信仰へは入りにくいやうです。商店の人にも仲々

せう。佛教語には複雑で一寸理解できないものが多いから」

## 佛教語に就いて

立石「佛教の言葉で普通一般に使はれてゐる言葉が随分あるやうですね。そしてその意味がよく解らずに使つてゐる」

中村「そうです。新聞などを一寸見てもすぐ百位ひの佛教語は見付かります」

立石「例へば冥加などと言ふ言葉もそうでせう。私共はよく冥加なことをしたなぞと云ひますが、一體冥加とはどう云ふ意味なんですか？」

中村「何事によらず、我々の受けてゐるものには、直接目には見えないが色々な恩寵が集つてゐる。凡てのものが、社會、國家の

龍によつて成立してゐる、そして我々が、これを受けとるやうになつてゐるのですから、これを有難いと思つて受取るのが宗教的な態度で、これを冥加と云ふのでせう。目に見えぬ力が加はつてゐる意味ですね」

大鹽「因果などと言ふことも云ひますが」

中村「因果と云ふのは一般には縦の關係だけのやうに考へてゐますが、佛教では、この因と果の縦

の關係だけでは理論がなりた、ないものとしてゐます。例へば、  
 20に11と云ふ定量的な關係だけではこれは科學の立場です。因果と云ふだけでは縦の關係だけでは、釋尊はこの因果を更に別の因果で破つてゐる。つまり簡単に云へばこれに横の關係を加へてゐます。世の中には二と二を加へて四にならない場合の方が實際には多いので更にその時の環境、周圍なその條件が加つて來て、始めて正しい結果が出て來るのです。  
 一般に道德の基礎が因果的であるときめてしまつてゐるから、動きが取れなくなつてゐる。一度悪いことをすれば悪人でもう救はる道が無いと云ふやうなものでなく、周圍の色々な條件を整理して行けば、そこから抜け出ると云ふ積極的な態度がなければいけない

ので、佛教では決して因果と云ふものにとらはれてゐません。」  
 大鹽「よく縁とか縁起とか云ふことを聞きますが、どう云ふことを云ふのでせうか」

### 縁とは何か

中村「佛教で云ふ縁には與力縁、無力縁、逆縁とあり、それを全部總括したものととして増上縁と云ふのがあります。これらの縁が集つて、凡てのことが成立つのでこの縁に就いてはインドラ網と云ふ話があります。これは帝釋天宮に懸る寶の網で、その網には一つ一つ珠がかゝつてゐて、その一つの珠に他の無數の珠の影が映つてゐて、その影がまた他の珠に映ると云ふ具合に一つの珠の中に無數の影が相映じてゐる。縁と云ふものもこの珠の影の様に重々無盡に

相即相入してゐると云ふことを物語つてゐるのだと思ひますが。

これに就いては私が以前上海に参りました時に、居士林と云ふ處に行つたことがあります。それは王以と云ふ人が會長で、まづ淺草の觀音様の様に澤山な人が集つて來ます。そこに座禪をする部屋、念佛をする部屋などがあつて、その部屋の廊下の向ふに鏡の間と云ふのがある。それは四方鏡の張つた部屋で、そこに這入ると自分の姿が四方八方に映つて、その映つた姿がまた映ると云つた具合に自分が見えない様な遠方までずつと重なり合つて見えます。縁と云ふものの姿を見せたものでありませう。

これとは意味が少し違ひますが印度の話で共鳴と云ふ話があります。印度のある王様が壁畫を描せ

やうとして二人の畫工に依頼した。一人の畫工は一所懸命に美しい精密な畫を描いてゐるのに、その向ふ側の壁を受持つた畫工は唯一心になつて壁を磨いてゐるだけである。する中に一方の畫工の壁畫が出来上つたので、王様が御覽になると實に美事なものだが、他の畫工は壁を磨いてゐるばかりだから、王様が怒つて、何故お前は畫を描かないのだと云ふと、「いや立派に描いた」と云ふので、その壁を見ると、成程向ふ側の壁の繪が、その鏡のやうに磨いた鏡に映つてゐた。と云ふ話です。これは木蓮と舍利弗の化身だつたと云ふ話ですが、己の心を一心に磨いておれば、相手の心はそれにじかにつて來ると云ふ意味でせう。人に共鳴するためには心を磨いておかなければならぬと云ふ」

## 佛教と全體主義

佐藤「佛教では、個人の力と云ふものが非常にかすかなものになつてゐます。近頃全體主義といふことがやかましく言はれてゐますが、全體が個人を犠牲にするといふ風に考へてはいけない。一將功成つて萬骨枯れるといふのは、支那式の考で、私共は部隊長のからだには後光のやうに澤山の將兵の武勳が輝いてゐるといふやうに考へなければいけないのでせう。全即一であり一即全である。其の考へ方は佛教獨特でせう。

個人が本當によくなつて全體がよくなる。全體主義といふのはオトマル・シユパンあたりが言ひ出したのでせう。シユパンは御承知の通り經濟學者ですから、全體と個人の關係を、全體主義的に規

定して、其の上に經濟學を組織しようとしたのです。

個人を全體の中に生かさうとして色々やつてゐますが、どうもうまく行つてゐないやうです。佛教にはこれがあるのです」

中村「佛教でも今日の時代ではその方面に力を入れてやつて行くんですね」

大鹽「佛教にはこんな立派な思想があるのに、なぜもつと行き渡らないのでせう」

佐藤「思想的には意識しなくても行動の中へは随分浸み込んでゐるのでせう。先日吉田(絃二郎)先生のお宅でも出た話ですが、日本兵隊が強いのは佛教のお蔭であると云つてゐました。特に佛教の信念であると意識するしないは別問題だと思ひます。」

## インテリと佛教

加藤「先刻お話がありました、インテリは理論で説かないと承知しないといふ問題ですが、あれは理論で説いて行つたのではどこまで行つても信仰に入れないのではないでせうか。文化科學系統のインテリはなまじ社會科學なぞをやつてゐるから、そつちの方に氣をとられて、仲々信仰に入り憎いのではないでせうか」

中村「然し、インテリには或る程度まで理論で裏付けられたものを持つて行かなければいけないので、彼等の持つてゐる理論と生活とが一致しない場合、自分を反省する。そこで信仰が出てくるのです。それに、理論が凡てではないけれども、矢張り理論の基礎がないと迷信に陥り易いし」

佐藤「それに就いて私はいつも思ふのですが、知識階級、特に文化科學や社會科學などの系統の人の理論といふのは非常に狭い意味で、人間的な理論に限られてゐるのです。つまり人間的な理論で一切を割り切らうとする。だから無理がある。つまり理屈からは信仰へはいれないといふ事になるのであります。親鸞が——不思議と信じつる上は兎角の御計ひあるべからず候——と言つてゐる、不思議とは人間の理性では、割り切れないものを言つてゐるのでせう」

## 商賣道

加藤「また商業關係の人は信仰に入り憎いと云ふ話がありました、それは彼等がいつも物を扱ふのを主としてゐるので、物を高く

見ると云ふ傾向がそこから出て來るからだらうと思ひますが」

中村「それもありますね。一般に宗教を誤解してゐる點があります。商賣は物質的、宗教は精神的と分けて宗教を隱居仕事のやうに

思つてゐる。佛教では物と心とを同じに見てゐるのです。商業でも扱ふ品物を施として見てゐれば、

商業の意義もずつと高くなるのでせう、或る品物を十錢で賣つたり買つたりする。ところがその品物

## 支那女流詩選

滅亡のうた

呂萍雲

かなしきは亡びし國に遺されて

まどへる民のすがたかな

蘇門の山に鎮座し

銅狄もいまははや

渴仰ぐ術なく埋れて

古にし都は影もなく

禾黍麥秀を歌ふばかりなり

あはれ大地の山河異るや

とへどこたへぬ草萊のなみ

——二橋新譯——

は十錢ではとても出來ない。十錢と云ふ金額で表現すべきものではない。然しこれは天地の恩を賣り且つ買ふのであるとして、有難く受取る、讓渡すと云ふ氣持が出なければならぬのです。物は物でない、物と心とが一つになつてゐると見なければならぬ。物と心とを別に見てゐるから誤解が生じて來るのです。

## 日本人と佛教

加藤「現在の日本人にもつと自分が佛教信者であると云ふ自覺が出ないものでせうか。佛教的なものは日本人が全部持つてゐると云ふことは今迄のお話を伺つて我々にも解りますが、それでは自分には佛教信者かと云はれればはつきりさうだとは云へない、信者でないかと云はれれば無論さうとも

云ひ切れない。この點をもつとはつきりと云ひ切れるやうに導いてくれる手だてが欲しいと思ひます」

中村「それには矢張、或る程度理論で裏付けると云ふことが必要でせう。そしてそれを生活と對照して反省すると云ふこと、そこに信を生ぜしめると云ふことが必要でせう。然しもつと廣い意味では、佛教的な氣持でゐれば、佛教信者といふことを特に言はなくとも、それで立派な佛教信者であると云へるのです。カイザーリンクが「驚くべきことがある。日本人の婦人は生れながらにして、悉く佛教信者である」と云ふ意味のことを言つてゐます。つまり子供に對する没我的な慈愛を指したのです。實際には日本人は皆んなさうなのでせう。」



隨 筆  
或る農夫と白い犬

篠 原 文 雄

る。

蘆花は明治三十九年ロシアのヤスヤ

ナ、ポリヤナに文豪トルストイを訪問

したことがある。ト翁訪問のことも、

蘆花の作中に出て来るので讀者にはお馴染

みのことであらう。ト翁は日本の文學者の

往訪をひどく歡ばれて、ト翁自ら秘藏して

ゐた銀の笛を蘆花に與へたといふことであ

る。

この銀の笛はかつてトルストイが青年將

校時代、從軍の際用ひたといふ由緒ある笛

で、いはゞトルストイの形身ともいふべき、

はなはだ貴重な贈物なので、蘆花は日本に

歸る船中に於ても、肌身はなさず大事にし

て、また盜難をおそれて誰にも見せなかつたといふ。

蘆花はト翁から贈られた土産の笛をいだ

いて日本に歸つて來ると、間もなく武藏野

に移り住むやうになつた。そこに居を構へ

てから白い毛並の美しい犬を飼ひ始めた。

「みづのたわごと」にもあるやうに、蘆

花はこの犬を白と名付けた。子無き蘆花夫

妻にとつて白はなんぼうにも可愛がられ

た。白はきつと伶俐な犬だつたにちがひな

い。白が廣い家屋敷の中で遊んでゐる間は、

書齋に引籠つてゐて仕事が出来たが、白の

姿が見えなくなると、蘆花は非常に氣にか

けた。といふのは近所に住む土着の百姓の

徳富蘆花の名作「みづのたわごと」を讀まれたお方は、ご存じのことと思はれるが、蘆花が晩年詩情こまやかな武藏野の一隅、郊外千歳村の粕谷を永住の地として、所謂美的農生活の中に、一匹の毛並の白い犬を殊のほか愛してゐたといふ一文がある。

或る農夫と白い犬とは、この蘆花の白い犬のことで、或る農夫自身も、蘆花にたいへん愛されたお百姓さんだといふのであ

畑を荒したり、鶏を追ひまはしたりするといふ、白を非難する評判が蘆花の耳にはいつたからである。

近隣の百姓が折角丹念して作つた農作物を新しい移住者の飼犬のために荒らされたのでは、百姓達が白を非難するのも無理がなかつた。蘆花は白を溺愛してゐたが、百姓達の非難にはひどく弱らされ、また非難の言葉の前に何の返す言葉もなかつた。自ら村入りをした蘆花にとつては村民に申譯がなかつたのであらう。それで、畑を荒らされた持主の農家に、のこのこと出かけて白の悪戯を心から詫びるのだつた。また養鶏を傷つけた農家に行つても同様に詫びるのだつた。義理堅い蘆花はいちいち代償物を添へて謝罪したといはれてゐる。それ以來といふものは、蘆花もほとほと

困惑して、近隣に遊びに出かけた白をよびもどすことをしきりに考へふけた。白が

名案が浮んだ。

それはトルストイから贈られた銀の笛を吹いて、白をよびもどすことだつた。あの音色の美しい笛を吹けば、白はきつともどつてくるにちがひない、と自らの名案に微笑するのだつた。

それから蘆花は白の姿が見えなくなると、銀の笛を吹いた。蘆花の思ひどほり白はどこからともなく歸つて来るのだつた。

白はよほど、この笛の音が好きだつたにちがひない。笛の音をきくやうになつてから、白は鶏も追ひかけなくなり、畑も荒さなくなつたのだ。近隣の百姓達はたいへん喜んだ。それ以上に蘆花はうれしかつた。蘆花はふたゝび白がいたづらなどしないやうにと願つた。白はもう二度といたづらをしなくなつた。伶俐な犬だつたので、お



そらく蘆花の心が通じたのであらう。

蘆花はまもなく白を甲州の一農夫に與へてしまつた。そして、トルストイから贈られた大切な銀の笛もともに與へてしまつたのである。農夫は銀の笛を懷に白を連れ

# 從軍僧

廟の横では折柄、中隊の戦死者を火葬に附する所であつた。それは適當な場所がなため、桑畑の中に穴が掘られ、彈丸の中で行はれた。私が行つた時には既に戦死者の身體に火が點ぜられてゐた。すると、坊さんだけはどうしても我々と同じやうに地に寝なかつた。藤田賢龍一等兵は、燃え上る煙の前にすつくと立つて、瞑目し、朗々と經を誦した。危いから伏せる、と中村少尉が何度も云つた。大丈夫です、と僧侶は靜かに答へ、長い經を續けた。彈丸が桑の木に何發も來て當つた。私は、この、日頃

て甲州の山村に歸つた。農夫は蘆花からもらつた白を我が子のやうに大事にして育てゝゐた。白もこの農夫に親しんだ。

白は農夫の家に飼はれるやうになつてから、農作物を荒すやうなこともなく、また

自分は糞坊主だと稱し生臭坊主を自認して、實際普段は少しも僧侶らしくなかつた藤田賢龍一等兵の姿を仰ぎ見た。それは樹木のごとく、確固として地から生えたやうに、何か崇嚴なものがあつた。經を誦し終ると藤田一等兵は靜かに眼をひらき、思ひ出したやうに、淺い壕に身を伏せた。私はふいと、私も何時、彈丸に倒れ、土に歸するかも知れないし、何時、藤田上人に經を誦されるかも知れないと思つた。兵隊の運命はことごとく同じである。この戦場で、又、部隊は相當の戦死傷者を出した様子である。

## 「土と兵隊」より

その必要もなかつたが毎日のやうに山の中をかけまはつて遊んでゐた。農夫は白が夕方になつて見もえないときなど、銀の笛を吹いた。この銀の笛は一里四方にまで響くといふ、すばらしい笛の音だつた。白はどんな山中に入つてゐても、この笛の音をきくと、一目散に歸つてきた。

蘆花は白のことを思ひ出しては、甲州の山村に二度も訪れたとのことである。蘆花は白を見ると泪ぐみ、白もまたよろこび蘆花の傍をはなれなかつた。歸京の時など、蘆花は白に物言はんばかりにして別れるのだつた。白も悲しさうにいつまでも吠えつゝけた。

蘆花が東京に歸つてから間もなく、白の姿が見えなくなつた。農夫は心配して白をさがしたが皆目行方がわからなくなつた。銀の端をいくら吹いても白はもどつてこなかつた。農夫は銀の笛を蘆花の形見に、また白の形身にと肌身離さず持つてゐる。



朝鮮 盤江八年坊

しづかなる心を得れば十年の病の  
道もよろこびに満つ

評—この作者の如き心境に到れば病も亦  
善知識である合掌禮拜して感謝する  
に値するであらう。

通州にて 天津山田昇

このあたり心のこして果てにけん  
秋風吹けば塚泣くことし

評—通州城をよぎる日本人の誰もがこの  
やうな痛心を抱いて悲しく眼をそむ  
け心を揺らすことと思はれる。

長野縣 宮澤榮子

みいくさのこの年花火上らずて秋  
は深めり伊那の山里

評—みいくさの秋、國民はいづれもつつ  
ましく身を持してゐるのである。

小樽市 中村ももん

冬すでに近づく庭の地の白し落葉  
の上も薄霜の置く

倉敷市 横江史枝

子らをみな嫁かせ給ひしづけくも

寂しくいます老いし父母

大阪 吉廣夏生

一日の手爲事了へて疲れたる妻を  
し見れば心暗しも

京都市 永田七郎

水の面をはふ如く飛ぶ鶴鴎のかげ  
清くしてしづかなる瀬

静岡縣 一向山人

雨晴れし朝をうれしみ素足にて大  
地に立てば土のいきれす

福島縣 齋藤華舟

大工われ夜業までして歸り見れば  
男の子三人は假寝してゐし

大阪市 渡邊和泉

戦死せるわが兄常にはおとなしき  
性なりしをとその母の云ふ

京 城 水上菊子

愚かなる母はみづから省みず子を  
叱りては悔いを重ねる

姫路市 内海一音

苦しきは世の常なりとききしかど  
悟らぬ我の狂ほしきかな

東京市 三浦順子

咲くままにはびこらせたるつゆく  
さもすがれすがれ秋寂びにけり

支那海城 藤家盛一

しのべよと萩の一枝おくりこしふ  
るさと人の情うれしき

群馬縣 佐俣太郎

水の面は秋の空をばうつしたり入  
日を脊負ふ蟬鈴さへ見ゆ

城 西 梓 賴子

はる／＼と東の旅に思ふかな文に  
こもれる母のみなさけ

千葉縣 高橋美矢子

こほろぎの鳴く音細りて紅葉ちる  
故なく人の戀しきはなぞ

富山縣 藤田四三九

提灯の波にゆられつ大君のみたて  
となりし君を思へり

小樽市 中村茂舞

いちちやく雪にそなへて冬を待つ  
銃後を守る家のしづけさ

奈良市 藤 一如

救はるる感謝に何時か頼ぬれて唯  
南無阿彌陀佛阿彌陀佛

飯田市 宮澤重子

中庭の松にかかりし月まろし二百  
二十日もややに風あり

和歌山縣 奥村映水

廣東の堅き砦もつかのまに打ち碎  
かれて御旗かがやく

京都市 福島孝治郎

つはものの癪を癒さん假病舎作る  
われらは地を拓くかな

東京 須磨 高雀

漢口は遂におちたり日の本のたけ  
く正しきますらをの手に

北海道 花田蘭佳

あやまれるつかさによりて徒らに  
支那の國民なやまされつつ

小倉市 益田牙谷

はてしなき旅行列をながめつつあ  
つき涙のこみあげて来ぬ

東京市 三野輪江雪

水霜が降る夜と思ひ庭にあるア  
ヒを入れてやすくねむりぬ

東京市 小池智子

久にして戸外に出でてなかわれば  
秋晴の空からす舞ひとぶ

## 投稿規程

官製はがきに一回二首以内  
とし「淨土」編輯部歌壇係  
あて送ること。

冬

空

## 吉田 絃二郎

いつの間にか庭の辛夷の黄葉も落ちてしまつた。渡鳥の群も來ず、秋はすでに冬に入つた。つくばひの根方の露の花も茶の花も山茶花も自分自分の世界にとどこもつて靜かに思惟をこらしてゐるやうに見える。時をり庭の櫓に、鶴や鳥が來て高い聲を多空にひびかせる他には、終日竹林も、紅葉の植ゑ込みも靜閑そのものゝ感じである。たま／＼鶴やのじこや四十雀の木の間にぼつねんとしてゐるのが、かへつて初冬のもの靜かさを深くする。

春から夏の間は、鶯や三光鳥や懸巢の聲に朝毎の夢を破られたが、このごろは明け方の夢をさますべき鳥の聲もない。鶴にしても、のじこにしても庭の木立の片隅にじつと、つましやかに近づく冬のわびしさに胸を傷めてゐるやうな鳴き方をしてゐる。

朝床の中で眼ざめる。今日もまた自分たゞ獨りなのだと考へる。背骨が疼くやうだ。

家の中は山寺のやうにひっそりしてゐる。誰か庭を掃いてゐるらしい。時折落葉を掻く音が聞える。じつと耳を澄ましてゐると鶴の音も聞える。鶯の雀鳴きも聞える。「今日も亦耐へられるだけ寂しさに耐へて見よう。」わたくしは起きて先づ佛間の花を取りかへる。昨日東京まで出かけて行つてもとめて來た菊の花を生ける。香を焚き、佛前に飄經する。

「未來のことは人間にはわからない。死とともに一切は空なのだ。」經を讀みながら、絶望の底に蹴落されることもある。菊を生けながらも熱いものが胸先に迫つて來る。凡夫のあさましさであらう。

つひこの程、たゞ一人の男の子を戦地で失つた七十幾歳の老人が、畑に出ては陸稻を刈り、甘藷を掘り、麥の施肥をしてゐるのを見ても、自分はもつと強く生きなければならぬと思ふ。

山の墓に行けば誰か知らぬ人が詣つてくれたと見えて龍膽が供へられてある。わたくしが死ぬとともに山の墓は無縁になるであらう。それを思へば一日でも長く香花を供へるために生きてゐなければならぬ。

山の墓はたゞわたくしの一生だけ香花を供へられるだけであらう。しかしその墓こそ最も深い悲しみと懺悔の涙をそゝがれた墓であらう。山の墓も朽ち、壊たれ、骨も土にかへつてしまふであらう。しかしそこに一莖の葉の萌え出でんかぎり、かつて亡き人のために流された最も深刻な悲しみの涙をさゝやくであらう。

x

この夏薩摩に旅したをり、夜、西鹿兒島驛にわたくしを見送つてくれた娘さんが二人あつた。ほんの十四五歳の娘さんであつたが、その一人が急死したといふ事を聞いた。顔もよく記憶してゐないが、氣の毒なことである。人間は餘りに早く死ぬ。

一日生き延びることのありがたさをしみじみ思ふことを知つてゐる。しかし五年十年生き延びることのありがたさを感じる心のすくないのは何故であらう。五十歳の死、七十歳の死、百歳の死も終句は蟬蛸の命、露の命とけぢめはないであらうに。

四十歳で死んだ人は三十歳で死んだ人よりも幸福であらうか。七十歳で死んだ人は五十歳で死んだ人よりも幸福であらうか。十五歳で死んだ人は五十歳で死んだ人よりも不幸であつたらうか。

一日生き、そして一日生きただけの奉仕を果し、感謝をさげ得た人は一番幸福であるといへやう。

七十年八十年生き得たとしても、人に嫌はれ、あさましい嫌憎に取りつかれた人が何で幸福であらう。

x

昨日の朝の新聞には元の陸軍新聞班長であつた古城少將の自殺の記事がかゝげられてあつた。氏が十年前夫人を失ひ、その後男の手一つで三人の子供さんを育てゝ來られたといふことが、ひどく心を打つた。自殺の原因は何か知らない。しかし氏の心境を察することはできる。

戦場の人々についての記事ぐらゐ側々として強く胸に迫る

ものはない。すべてが死を直前にして生きてゐる人々のせいであらう。

故郷の子供にチョコレートを喰べさしてやりたいために不自由な戦地で銀紙を集めて、故郷の子供に送つてやつた兵隊さんがあつた。しかも故郷に銀紙が着いたころは兵隊さんは戦死してゐたといふ話。

漢口攻略の兵隊さんが、山の強行軍に愛馬を岩と岩の間の穴に落してしまつた。馬を見捨てるに忍びず、三晝夜馬の傍を離れず、つひに馬の最期を見とめてやつたといふ話。

傳書鳩を使つてゐた兵隊さんが戦死した。その姿を見た鳩は何うしてもその主人の傍から去らなかつたといふ話。

たゞ一人で數頭の馬をあづかつてゐた若い兵隊さんは敵に襲はれた。かれは自分の身を楯として數頭の馬を助けたといふ話。

日々の新聞にはこのやうな話が後から後からと傳へられて来る。

普段はわたくしたちの周圍に働いてゐる大工さんであつたり、小商人であつたら、夫婦稼ぎの小作人であつたりする人であらうが、戦場に出て、いざとなれば慈悲深い佛性を現はす。無名戦士の尊さを顯はす。鳩までがさうである。人間は人間が想像してゐるよりも惡鬼的なものを持つてゐるかも知れぬ。しかし同時に御佛そのものゝ光りをも内包してゐる。鳩も馬も亦。

知れぬ。しかし同時に御佛そのものゝ光りをも内包してゐる。鳩も馬も亦。

x

今にも時雨が降つて來さうだ。

空が曇るとともに鳥も鳴かなくなつてしまふ。

こゝいらではまだ稻を刈つてゐる人の影が見出される。

今年は野良には老人や女たちが多い。

田の畦の野菊も大方は色褪せて、散りかゝつてゐる。寒い

山の北風におびえてゐるやうだ。

死を前におののいてゐる人間を御佛の目で見たら、ちやうどこのごろの野菊のやうでもあらう。

一切衆生の悲しみを救攝せんとする佛心のありがたさが身に沁むやうだ。

七八尺にも足らぬやうな狭い流れに綱を垂れて黙々としてゐる男がある。田の畦にしゃがんでゐる男も黙々として山を眺めてゐる。麥を播く男も、稻を運ぶ男もたゞ黙々として動いてゐる。石も草も雲も小鳥も黙しては初冬の空に對してゐる。

默々たる自然の相ほど、魂の底深く迫つて來るものはない。合掌して雲を拜し、人を拜す。



筆 隨

## 親 切

金 子 和

大分前の話になるが、一夏私は北海道を旅行したことがあつた。あいにく洪水に出會して、行く行く難儀を重ねた。池田といふ町では、馬喰など、一しよに木賃宿に泊らねばならぬ始末であつた。

私は根室まで辿り着かねばならぬのであつたが、懷中も乏しくなり、ある驛で辨當を買はうとした時には、とつさに辨當と壽司とどつちが賤いか胸算用をせねばならぬ程であつた。ところが、その時は壽司も辨當も同じ値段であつて、僅かに饅頭がやすいのであるが饅頭屋は歩廊の向ふの端で賣つてゐて、なか／＼私の車室の方へやつて來ぬのである。私

は大聲で叫んで見たけれども効目がない。「あら、聞えないのだわ。」

その時からいつて、歩廊を少し馳け出したが、「お饅頭屋さあーん！」といつて饅頭屋を呼んで呉れた人があつた。

「どうも濟みません。」と私は頭を下げたが、その人は、誰かを見送つて來た藝者とも見える婦人であつた。しかし饅頭屋はやはり聞えなかつた。小さな驛であつたゝめ、さうかするうちに汽車は滑り始めてゐた。

今度はその婦人が、「お氣の毒ですわね。」といつて呉れるのであつたが、効目がなかつたとはいへ、その親切は非常にありがたく、心

にしみ入るやうに私には受け取られた。またかういふこともあつた。

私の肉親のものが旅先きで病氣になつた。東京から六時間ばかりのところであるから、さほど遠方といふわけではない。けれども、本人にして見れば、旅先きで一人寝てゐるのは心細い限りである。あいにく山の中の村に驛があり、そのあたりだけ市街地風になつてゐるといふやうな所だから、醫者があるにはあるが、内科、外科、小兒科から眼科まで兼ねてゐるやうな人である。氷を買はうにも半道は往復せねばならぬ。さういふ所で寝ついたのだから本人も心細い限りであるが、

東京にある私の方も同様に心細いのである。

病氣の由の電報を受け取つて、すぐ行くから返電しては置いたが、初期が大事な急性の病氣であつただけに、それまでの手當がどんな具合に爲されるものか甚だ心もとなかつた。

さてやう／＼に行つて見ると、病人の枕下に見知らぬ婦人がついてゐてくれる。それが二人までもゐてくれる上、十三ばかりの女の子供がゐて、ちよこまかとした用事を足してゐてくれる。

再び醫者がやつて来るやら、氷を買ひに私が走るやら、病人の糞便の始末をするやら、着くが早い。か澤山の仕事があつて、世話してくる婦人方がどういふ人なのか病人に訊ねる暇もない。また病人にしてからが、食事も咽喉へ通らず、大熱往來して、活潑に口を利くことも出来ない。夜つびて氷をかけながら、私は空しくその婦人たちに感謝するばかりであつた。

夜が明けるとまたその人達は何くれとなく世話をしてくれる。その時までに分かつたこ

と、いへば、その人達は一行三人でその地方へ保養に来てゐるものであつて、たま／＼私の肉親のものと同宿したのである。私の肉親のものゝ方が後から來たのであるから、その方が同宿をしたのである。

たゞそれだけのことであるが、何しろ田舎の宿屋で全く人手が足りない。また宿の人が格別不親切なわけではないが、病人に寝こまれては迷惑であるから親切が行きとどかない。本人はひよろ／＼になつて、からだも精神も弱り切つてゐる。それで見兼ねて看病をしてくれたのであつた。

幸ひ四五日するうちに病氣の恢復も見込みがついた。まだ當分寝てゐなければならぬが、人が付き切りになつてゐる必要はない。私自身は東京に仕事を持つてゐる。またその仕事を續けなければ、病人の療養費、宿泊費などにも差支へる次第である。私は、その同宿の人達の名前を聞いて、お禮を申した。けで、なほよろしく願ひして東京へ舞ひもどつたのであつた。

さうして、東京へ歸つて思ひかへしてみると、考へれば考へるほどこの人達の親切がありがたい。私は早速お禮の手紙を書いたのであるが、さてハタと困つた。

といふのは、私はお禮の文言を綴つて「何ともお禮も申しやうもございません。」と書いたのである。ところが、私は、かういふ文句を以前にも誰かに書いたことのあるのを思ひ出した。その時はその時で、やはり何か非常にありがたいことがあつてさう書いたのに違ひないが、それと同じ言葉では、今度の親切に對するお禮の言葉として、どうにもびつたりせぬのである。

前に書いた「お禮の申しやうもございません。」は、いはゞ一種の譬喩であつた。ところが、今度のは、本當に、何といつてお禮をいつてよいか言葉がないのである。たゞ／＼ありがたく感じるばかりで、とても口に出してこれ／＼だからありがたいとか、こんな風に感謝してゐるとか、さういふ辨別を越えてありがたいのである。

だからといつて外に分別もつかないから、手紙はそのまゝ送ることにはしたが、この人達の親切は本當にありがたかつた。

殊に私にありがたかつたのは、人の親切には色々あつて、親切は親切でも、受ける方で何となく受け憎い種類のものが無くはない。

特に、全然見ず知らずの人から受ける親切は、見ず知らずの人であるだけにこちらで氣心を使ひ勝ちである。それだから、親切を受けるのはありがたいのであるが、その親切が氣を遣はすにすら／＼と受け入れられる種類のものではなくてはならない。

これはまことに、我儘千萬な話であるには違ひないが、人間といふものはさうしたものである。

私が右の婦人達の親切に心から感謝したのは、その人達の親切がさういふ親切であり、その人達が、見も知らぬまゝに全く任せ切つてそのお世話を受けられる種類の人達であつたからであつた。全くこれは稀有のことである偶然といふか因縁といふか、事が病人に關し

てゐただけに、私は全くありがたかつたわけである。

親切は、受けてありがたいばかりでなく他に興へても快いものである。恐らくこの世には、親切を受けたことのないといふ人が一人もゐないと同様、人に親切をしたことのないといふ人も一人もいないであらう。人から受けた親切はいつまでも覚えてゐるが、人にし上げた親切はいついづれ忘れてしまふ。これは語るに落ちて、この私が、人からは大きな親切を受け、人にはこの小さな親切しかして上げなかつたせいかも知れぬが、私一個としてはさうである。

そして親切といふものは、いつ如何なる場合にも、また如何なる人に對しても施したいものであるが、その施し方には、自ら道すじのあることをこの頃つく／＼と感ずる。親切といふものも、やはり「集成つて水いたる」といふ風でなければならぬ。決して無理があつてはならない。受ける方で氣持が苦しくなるやうであつてはならない。

かういふことを、私は他人から受けた親切をあれこれと思ひ返して見て、やうやく納得するのである。

親切は一つの善事である。さうして世のなには、多くの善事がある。善事を爲し、善根を積むことは非難の餘地なきことである。しかしながら、善事の爲しやうは如何にあるべきか、といふことにはなかく／＼氣がつかない。無論これは我々平凡人の場合についてある親切をして却つて恨みを買ふのは夫婦喧嘩の仲裁の場合に限らない。世には逆恨みといふ言葉もあり、飼犬に手を噛まれるといふ言葉もある。これは逆恨みをする人、飼主を噛む犬が悪いのは言ふまでもないながら、その飼主の方にも多少の手落ちがなかつたとは俄かに定めがたいことであらう。

善事は爲すべし。親切は施すべし。しかし能ふべくんば、善事を爲す爲し方、親切を施す施し方、そのやり方にまでも親切を行きわたらせたいものである。人から親切を受けてさういふことを追々に感ずる次第である。

# 大衆小説 捕物競争

吉田初太郎作

比羅夫画



## 喧嘩仲間

牛込の寶相寺前の草原で村松珊瑚郎が、犬を相手に投網の稽古をしてゐた。干魚が宙に投げられると、犬は茨や刺草のなかを躍りこえて走つた。と、ひゆうと小石を横合から抛つたものがある。犬は勢よく跳返つた飛礫に驚いて、ぐつと右へ走つた。

その刹那、珊瑚郎の投網は空しく草の上に落ちてしまつた。不本意な面持で振返へる珊瑚郎より先に、

「はゝゝゝ、これは失禮——ゆるせ。」

同僚の見習同心、鬼頭惣太夫が面白さうに笑つた。

「いや、あんたでしたか……あんたなら。」

珊瑚郎は好人物らしく穩やかにいつた。

「高村さんがお呼びだ。俺とお手前の二人に話があるさうだ。來たまへ。」

「承知しました。」

珊瑚郎が投網を手繰つてゐるうちに、惣太夫はぐんぐんと歩き出してゐた。

寶相寺の練塀をまがると正面の酒井侯の下屋敷下を土埃をあげて四五人が叫びながら走つてくる。

「拘摸だ、拘摸だッ、つかまえてくれ。」

その喚きをきくと同時に、鬼頭惣太夫はその土煙のなかにあらあ

らしく御きこんでゐた。

「待てッ、こやつ……」

惣太夫は一間ほど引きづられたが、つかんだ相手の腕は離さなかつた。

「離せッ、ふざけた眞似をするな。」

三十八九のたくましい浪人だつた。血走つた眼で惣太夫を睨据ゑた。

「何故、お逃げなさる?」

「逃げる? 莫迦なッ、拙者は拘摸を追ひかけてゐるのだぞ。拘摸か拘摸でないか、貴公には見分けがつかんのか?」

そのとき、手代風の若者が叫んだ。

「やッ、本當の拘摸は、あそこにつかまつてゐる!」

お組屋敷の高窓の下に、ならずもの風の男が繩尻を取られて引立てられてゐた。

「おのれ、拘摸奴。大切な財布をかへせッ……」

若者は走り寄つて腳噛みつくくと、ならずものとはげしく揉み合つた。

「控えろ、莫迦者ッ!」

繩尻を取つた珊瑚郎は、二人を分けると、きびしい聲で、若者を叱つた。

「お前が拘摸だと呼ぶから、木戸口へ逃げこまうとするこやつを先

づ迂亂と見て捕えたのだ」

「へい、ありがたう存じます。財布には二拾兩の大金が入つてをります。なくしては御主人への申譯に死なねばなりません。お取戻し願ひます。」

「もちろんだ。身なりをととのへ番所まで一緒に来い。」

安心した若者は、はだけた着物を取繕はうとするとたん、足もとにばさりと落ちたのは印傳の革財布であつた。

「やッー」

瞬間、若者とならずものとは、ひとしく顔を蒼くした。

「お前のふところから落ちたやうだが、財布ではないか？」

珊瑚郎は眉もうごかさなかつた。

「はい、確に盗られたものでしたが、どうして私のふところに……」

「くだらぬことをいはずに、なかを極めてみる、不足はないか？」

「はい、確に二拾兩ございますー」

それをきくと珊瑚郎は、ならずものゝ縛めを解いた。

「呆れた奴らだ。盗りもせず、盗られもせぬのに、逃げたり追ひか

けたりする。性根をしつかりさせろ。これから、町なかを理もなく

騒がすと容赦なくひつくゝるぞ。今回だけは宥してつかはす。」

珊瑚郎は、狐にでも誰かれたやうに、ぼかんとしてゐる二人を後

目に、快心らしくにこりと笑つて、惣太夫と浪人とが、いまもけん

けんと喚き合つてゐる町角へ歩みよつた。

## 捕物の褒美

「面白いものを見てまいりました。」

娘の利恵が、美しい顔をほころばせた。父親の高村源右衛門は茶をすゝりながら、利恵の臍脂を刷いた口唇を贖めた。

「矢來下で、村松珊瑚郎さんが拘摸のふところから、財布を、盗られた手代のふところに素早くもどして、二人を宥してやりました。」

「珊瑚郎ならやりさうなことだ。して、鬼頭も一緒に筈だが、あれは何うした？」

「惣太夫さんは、間違へて御浪人を捕え、さんざんに油を搾られてをりました。」

源右衛門は、さういふ娘の表情をじいつと見守つた。

「いやですわ、そんなにじいつと御覽になつては……」

利恵は無邪氣に笑つた。

「はゝゝゝゝ、ゆるしてくれ。お前はそれをどつちにも氣附かれずに見てゐたであらうな。」

「はい。」

源右衛門は、安心したやうに、おだやかに微笑した。

利恵が自分の居間にさがると、源右衛門は庭へおりて、明るく光る敷石を踏みながら、腕を拱いて呟いた。

「矢張、婿にするのは珊瑚郎かな？」

枝折戸の外から、のつそり珊瑚郎が姿を見せた。

「おゝ、貴公の頬はどうした？」

源右衛門が聲を弾ませると、

珊瑚郎はにこやかに半面のまだ消え去らぬ血花を手で抑えた。

「はゝゝゝ、これですか、い

やもう他愛ないことです。」

その明るい聲、澄んだ眼を見返へす

と、源右衛門まで落着けてきた。

そこへ鬼頭惣太夫が、ぬつと姿を見

せるや否や

「やい村松ッ、さあ返答せい。おのれ

はいったん捕えた拘摸を何故逃がした

のだ？」

と、どなつた。

「また喧嘩か、おまへたちは寄ると觸

ると喧嘩ばかりしてゐるな。」

源右衛門はにがにがし氣にいつた。

「いやお組頭、今日のは違ひます。」

「しかし珊瑚郎の頬に赤痣をつくつた



村松大繪

のはお手前だらう。」

「それは私ですが、あれは珊瑚郎奴が

理由もなく拘摸を逃がし、いたずらに

罪人をつくるのが天下の御政道でない

と嘯いたからです……」

「まあ、よい！」

「いゝえ、よかありません。」

「控えろッ！」

源右衛門の額には青い筋が浮上つ

た。

「お手前に珊瑚郎を呼ばせたのは喧嘩

させるためでないぞ。大切な御用の相

談があるからだぞ。」

流石は捕物上手とうたはれた高村源

右衛門で、その幅と壓力ある聲に、惣

太夫はそのまゝ黙つてしまった。

源右衛門は、二人を座敷へ請じると

いつた。

「惣太夫も珊瑚郎も先日來、御郡代か

ら再三、御加勢をたのまれた件だ——

といへば、想像がつかう。」

「熊谷堤の暴徒のことですな。」

惣太夫は元氣になつた。

「左様だ。あれの逮捕をいよいよお引受けすることにしたよ。」

「お組頭がお直々に……」

「もちろん、わしが乗出して差圖をせねばならぬ。まづ捕方の人數だが、二十人はつれてゆかねばなるまい。」

「多過ぎませう。」

惣太夫は傲然といった。

「いや、相手は博徒くづれの命知らずで、しかも人數は三四十人とまとまつてゐては、こつちも相當の警戒をせねばならぬ。」

「いや、私は手ごはくは思ひません。」

惣太夫は、はつきりといった。

「たかゞ田舎の博徒くづれです。所詮は烏合の輩です。まづ、腕の立つ捕方をおすぐりなさつて五六人もお伴ひなされば結構でせう……」

「なるほどお手前は岡田十松先生の免許取りであつたな。博徒くづれなど、ものゝ數ではあるまい。が、三四十人とまとまつた相手ではちと勝手が違ふぞ。」

「御念には及びませぬ。」

「さうか……」

源右衛門は軽くきゝながし、今度は村松珊瑚郎を振返つた。

「珊瑚郎、お主は？」

「私ならば一人で行きます。」

「一人で行くか！」

源右衛門は微笑した。

「お主のこと故、思案もあらうが、これもちと無謀でないかな？」

「そのかはり、すこし日數がかかることはあらかじめ御承知願ひます。」

すると、さつきから怒氣を孕んで、珊瑚郎を睨み据ゑてゐた惣太夫が聲をふるはせた。

「お組頭、珊瑚郎に出来ることなら私にも出来ますぞ。私も珊瑚郎とは別に一人で出掛けませう。」

「惣太夫、さういぢいぢのことを仲間同志で張合つては困る。そちは考え直せ。」

「いや、ぜひ、私をお差向け願ひます。」

惣太夫の眼にはなみなみならぬ決意が籠つてゐた。源右衛門はしばらく思案したが、總て決心していつた。

「ではめいめい出かけてみい。御用を首尾よくつとめ終せたものには、わしとしての褒美をなにか考えておこらう。」

## 捕物の噂

草いきれの強い立場茶屋に、鬼頭惣太夫がぬつと入つた。

「亭主はをらぬか？」

どなつたが返辭もなかつた。腰をかけて人通り寂びた街道を覗めてゐると、やつと土手下の藪かげから、のそのそと親爺が土間うちに入つてきた。

「聲がしたと思つたが、お客さんでしたか？」

惣太夫はその土まみれの姿を見ながらきいた。

「野良にゐたのか？」

「へい、近ごろは街道が物騒だで午すぎますと、ろくろく人通りもないで、野良いちりをいたしますだ。」

親爺は手を洗つてから茶を汲んだ。

「きいてゐる。三四十人の博徒くづれの追撈ぎが街道を荒すとかいふことだが、相變らず出るのか？」

「へい、昨夜もおそくまで徒黨を組んでの、大變な騒ぎでございまして。お江戸から一週間は前から有名なお捕方が見えたといふので、百姓家を一軒一軒血眼で探し歩いてゐました。見つければ殺されてしまつたでせう。」

惣太夫は心が躍るやうにかんじた。

（珊瑚郎のやうな鈍間な眞似はせぬぞ。この捕物で珊瑚郎に勝てば、利惠さんと夫婦になれるのだ！）

・立場茶屋を出て、惣太夫は初めて、莞爾と笑つた。土手は案じた程もなく、熊谷宿に入れた。

旅館屋に着くと、そここゝの部屋部屋で、泊り客が大聲で語り合つてゐた。

「久下では夜つびて百姓家を蝕つぶしに探したさうだが、その役人はたりと見つからなかつたさうだとの。」

「餘程、目はしの利く素早い男だな。追撈ぎ野郎どもも嘸、口惜しからう！」

惣太夫は苦い顔をした。

風呂場へ行く薄暗い廊下で、すれ違つた男が、ふりかへると、

「鬼頭さん——」

と呼んだ。惣太夫は己れの眼を疑つた。相手は、三四十人の追撈ぎどもに追はれ、久下の農家あたりをうろついてゐると想像されてゐた村松珊瑚郎であつた。にやりと笑つてゐる。

「いよいよ、あんたも捕ものに出ましたな？」

「うん、お手前と競争だ。」

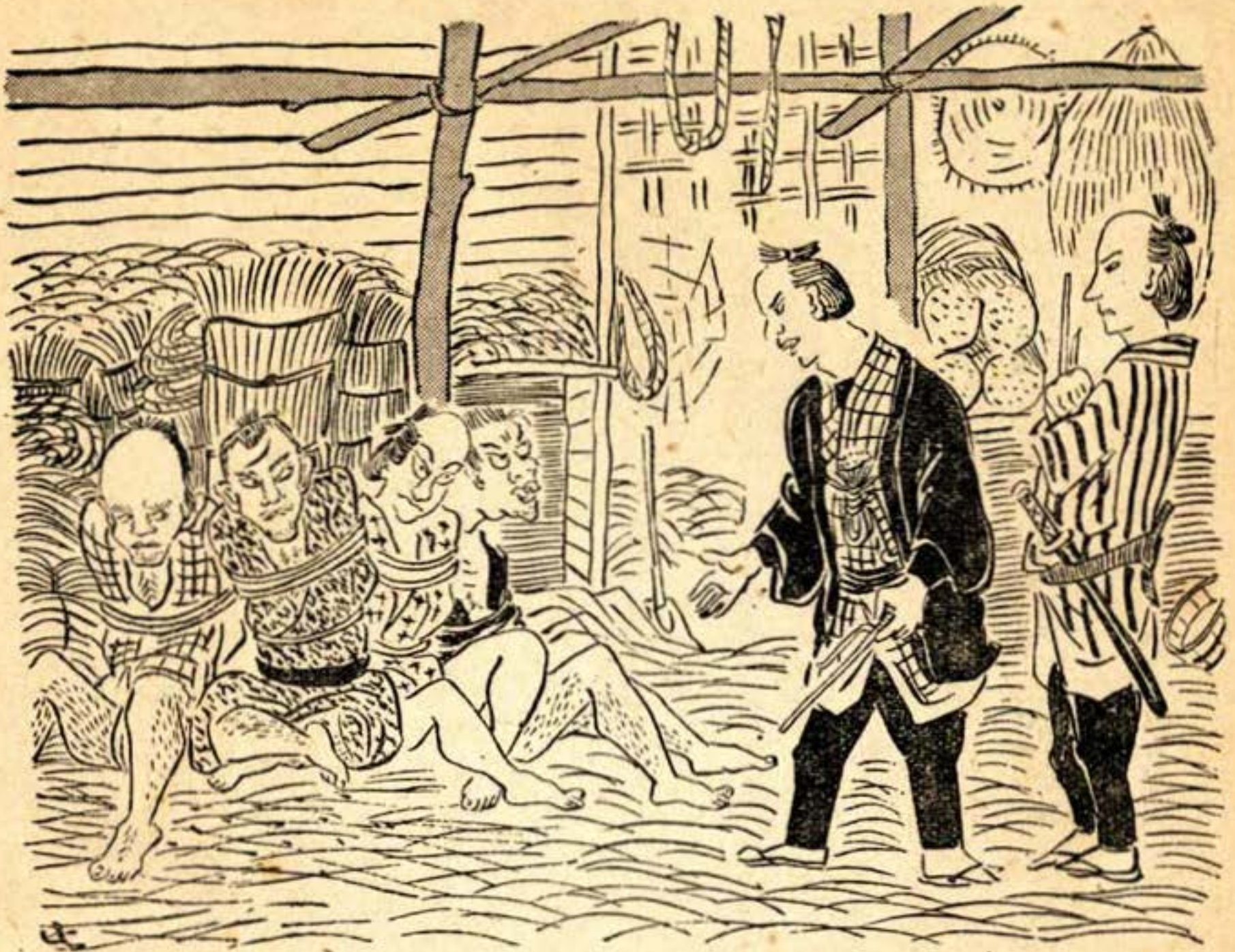
「はゝゝゝ、私の噂はもうきいたでせうな。」

「きいた。高村さんの前で吐いた高言と思ひ合はせると、お可笑しくなる。」

「私は、あんたのやうに岡田十松先生の免許取りでない。命知らずの無頼漢どもと太刀討ちは出来ないから、せいせい逃げ廻つてゐる。」

「それで、捕物ができるか？」

「できる。もう八人を召捕つてゐますよ！」



「莫迦をいふなッ！」

「信用されぬなら、それまでの話です。あんたもせいぜい捕物に盡力なさい。」

珊瑚郎は靜かに笑つて廊下を去つた。

（よし、卑怯なやうだが、あいつの跡をつけて、追剥ぎどもの様子を調べてから、こつちの捕物の方計を樹てゝやらう……）

惣太夫は、腕を拱いた末、かう考えると、いつでもあとをつけられるやうに身仕度をした。

## 理 非 理

旅籠屋を出ると村松珊瑚郎は提灯を吹き消した。濃い夜闇を、なれた足どりで、すたすたと歩くのを、惣太夫は懸命に蹤けた。

小半時ののち、藪かげの朽ちかけた納屋の錠を外し、そのなかに珊瑚郎は入つた。

やがて、ほそぼそした灯あかりが漏れてきた。惣太夫が覗くと珠數つなぎにされた八九人の荒くれ男が、結飯を貰つて貪り食べてゐた。突然——

「鬼頭さん、入りなさい。」

珊瑚郎の聲が納屋からひびいた。悸つとして思はず浮足立つと、「逃げちやあいけません。いらつしやい。」

聲はつゞいた。

納屋に入ると、裸灯のもとに珊瑚郎が微笑してゐた。

「御苦勞ですな。遠いところをよくお出でくだされた。」

「な、なんだとッー」

惣太夫は押戻されたやうに肩を引いた。

「見なさい。私はこれだけの荒くれ男どもをあつめたが、劍術の御達者なあんたは恐らくこれ以上を召捕られたでせうな？」

「俺はまだ一人も捕えてはをらぬ。」

「御冗談を。あんたは劍が達者で、よく劍道未熟な私を輕蔑された。頬を打つたり、傍若無人の惡口難言をせられた。今度あんたが熊谷くんだりまで出張されたのも、謂はゞ追拐きの捕縛より、私への對抗、いやがらせが主な理由だつたでせうが……」

「あたりまへだ。俺はあくまでも輕蔑してゐる！きつとお手前以上の捕物をして高村の利惠さんを奪つてやるのだ！」

「利惠さんを……あんたも利惠さんがそんなに執心だつたのか！」

珊瑚郎は呆れたやうに呟いた。

「鬼頭さん！はつきりいつて貰はう。それも私への對抗意識からではないでせうな？ぢつは、私も利惠さんは好きなんだ。私が捕物になみなみでない苦心をするのも、ぢつは、利惠さんの父であるお組頭の氣に入られたためなんだ！」

「それで、出来ることなら俺にこの捕物の邪魔をされたくないとい

ふんだらうな。」

「私ほど、切實に惚れてゐるのでなかつたら……」

「さうきくと俺もいよいよ本腰で、捕物に取りかゝれる。お手前のために手を引くことは出来ぬ。」

「鬼頭さん、誤解しては、不可ない。私のいふのはあんたが利惠さんに眞劍に惚れてゐないなら、好んで命を捨てるには及ぶまいといふことなんだ——」

「畜生ッ、もう一度いつてみる！」

「鬼頭さん、この捕物は非常にむづかしいよ。相手はみんなこの近在出の博徒くづればかりだから、界限の百姓どもは、みんな陰から日向からこれを助けてゐる。それをあんたが眞向ふから腕にものをいはせて召捕らうとするのは危険千萬な話ですぞ。高村さんの方へは私からいゝ工合に話すから、江戸へかへりなさい。」

「黙れ。黙れッー」

惣太夫は涙いほど蒼白になつた。

「八九人を捕えると、もう有頂天か！」

「そのやうに見えますか？」

「さんさんに逃げ廻つてゐて！櫻町の同心の面汚しだぞ。俺はそんな卑怯な眞似はせぬ。堂々とぶつかつて、あいつらを捕えてやる。たかゞ田舎の博徒くづれの追拐きなど……」

すると、いままで結飯を食ひたべてゐた一人が、惣太夫に憎惡の

眼を剥いてどなつた。

「へん、覆町同心が何んだ。まだ手前は田舎の博徒くづれのおそろしさを知らねえな。堂々とぶつかつて捕えられるものなら、こゝで待つてゐろ。もう一刻すれば、仲間が大勢、俺たちを取戻しにおし

### ピラミッド頂上の一石

法然上人がある日關白藤兼實公の邸で山僧の一人と出遭はれたことがあつた。

上人は山僧から淨土宗開立の根據を訊かれたもので、善導大師の「觀經疏」の付囑の一文であることを答へたところ、「苟しくも一宗を立てるのに、たゞ一文に依るとは餘りに輕卒でせう」と突込んで來た。

かの僧は比叡山へ歸つて、全山切つての學者であつた實地法印にこのよしを告げ、

「今日は、法然坊を遣り籠めて來た」と頗る得意であつた。

れを聞いた法印はそれは、

「そ法然坊をやりこめて來たのじやない、そなたがやられて來たのだ」と云はれた。

ピラミッドを成り立てる最後の役目は、その頂上の一石が果たしてゐることに氣のつかない人は間違にはならない。同時に斷片的なものを幾ら積み重ねても全體を生かす一石を据ゑないかぎり、宗教的な立命は得られるものではない。

かけてくるんだ。丁度いゝ機ちやあ無へか——」

「本當か?」

惣太夫が振返へると、珊瑚郎が頷いた。

「これから、私はこの男たちをつれて安全な場所へ逃げるのだ。」

「また、逃げるのか?」

惣太夫が囁るやうにいつた。

「もちろん! 三十人あまりがかたまつて押かけてくるのに何うして私一人で太刀打ちができますか?。逃げますとも! 相手が張切つた氣持を外され、外されして、ばらばらになつてかへるところを待伏せして一人一人を順々に捕えるのが私の流儀です。無理をしない。それは劍道も不鍛練で、あなたのやうに眞向から大敵に向へないからです。ではあなたは、こゝでしばらく待つてゐない。きつと奴等は大擧して襲ふてきますから……お大事に! さよなら!」

取殘された、惣太夫は、齒の根をふるはせた。微かな不安と恐怖をかんじたが、珊瑚郎のあとを追ふことは絶對にできなかった。

### 勝負

鬼頭惣太夫の死體が發見されたのは翌日だつた。村松珊瑚五郎が三十八人の暴徒どもを全部珠數つなぎにして江戸へ護送したのはそれから三ヶ月ものちであつた。

——鈴木桃野氏著反古濃字らかき卷一抄に據る——

## 中村辨康師擔當……

〔本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上、信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可〕

## 往生と云ふこと

問

往生淨土と云ふことに就て迷つて居ります。と云ふのは「往生淨土」が全く相反する二つの意義に解

淨土」に往生すること、捨此往彼とも云つて「こゝを捨て、かしこに往く」つまり穢土を捨て、淨土に往き生れることなの

味が違ひます。私達には「自ら頼むべき程の力」は無いのです。自分で淨土を建立するどころか、自らを救ふことさへ出来ない全くの無力

なのです。だからこそ如來様に歸命して如來様のお救ひを頼む

元より私達はよりよくならう

答

淨土宗に限らず淨土教一般に云ふところの「往生淨土」とは「阿彌陀佛の

と云つて一生懸命にそれに努めますけれども、何うしてもよく

たつた時、初めて淨土が建立されるのですから、造惡の凡夫の到底くはだて及ばないものです。

然し、さうは申すものの如來様の御慈悲を喜び、如來様の子として親縁近遠増上縁の近く親しく強い不思議の御縁を結ばせて頂きました身としましては、その心がけとしてだけでも、何時までも何時までも親に甘つた

之に反して「淨土建設」と云ふことは聖道門に云ふところの菩薩の大願でありまして、中々容易のことではありません。菩薩の十地を成滿する大行は畢竟「淨土建設」の爲であり、菩薩が其行願を完成して佛とな

念願して然るべきでせう。だから法然上人も「五逆十惡の者も生ると信じて小罪をも犯さじと思ふべし」と云はれた譯でせう。だから道徳的に云つて出来ない中からも出来るだけ「よい」と

念願して然るべきでせう。だから法然上人も「五逆十惡の者も生ると信じて小罪をも犯さじと思ふべし」と云はれた譯でせう。だから道徳的に云つて出来ない中からも出来るだけ「よい」と

それで維摩經には「其心淨け

# 信 仰 相 談

れば其土淨し」とありますから、如來様の加被護念を頂いて多少なりとも務めをさせて頂くことは畢竟「淨土を莊嚴する」一つの行爲と見て見えないことのないから、其心構へを強調させて、たまにはお質ねのやうな言葉も云はれるのであらうと存じます。無論淨土教の信仰上の意味ではありません。其邊をハ

ツキリ區別して御判讀願ひます。信仰的には頑張りのかない私達ですから、さう思つたとて思ふだけです。假りに少し位は社會の御役に立つことがあつても、それは如來様の御慈悲に促がされたのであればこそと思つて愈々益々信仰を増進させたいものです。

## 念佛に秘要ありや

(問)

授戒に等しいものと存じ候が、増上寺の門

頭に「五重相傳」なる御會のことと掲出有之候。念佛には秘要無之筈に候へ共、誠に不可解に堪へず候、如何なるものに候哉御伺ひ申上候。(荏原・學究念佛生)

(答)

五重相傳會は特別な時間と特別な場所とを選

んで修養する集りのことです。普通には平素信仰に心掛けて居ましても、色々なことにさまたげられて、中々信仰に徹底することが出来ません。そこで其機會を作つて信仰上の御話をきゝ自分の誤つて居た考へを訂正させて頂くやうに、先達の人から指南を受けるのです。貴君は「相傳」と云ふ文字に

すこしこだはつて「おかしい」と思はれた御様子ですが、學問と云ふことも「相傳」ではないでせうか。私達が家庭や學校や社會から教育されると云ふこと、それも畢竟「相傳」されることではないでせうか。だから其道の先達から教へを受けること、それが何で不可解なのでせう。況して我見偏見の強い私達に其我見偏見を破つて信仰に入ることが容易の事ではありません。だからお話なども聞きたいと思はれるでせう。其教へや指南をなしくづしに聞いたり、ちぎれちぎれに聞いたりしたのでは効果が薄いから、特別な日を區切つて専心に修養し習得するのが「五重相傳」なのです。五重とは自分の機根の下劣を知り如來様への信を確かにする爲めに信行解證の段階に依て習つて行くその五つ重ねのことで、秘

要と云ふものではありません。教育には課程があり手段があるやうに信仰を進める上に端的に課程手段を踏んで行くのです。法然上人の御言葉の中にも「口傳なくして淨土の法門を見るは往生の得分を見失ふなり。其故は極樂の往生は上は天親龍樹をすゝめ、下は末世の凡夫十惡五逆の罪人まですゝめ給へり。然るを我身は最下の凡夫にて、善人をすゝめ給へる文を見て卑下の心をおこして往生を不定に思ひて順次の往生を得ざるなり云云」と云ふ御言葉があります。後輩の得と申しませうか、先達から口傳を受ければそれだけ樂で幸せです。獨學で勉強する時は、かなり無駄道を歩かねばなりませんのを、指導教授の指南を受けつゝ勉強すれば能率が擧つて早く達成するでせう。それと同じことです。また假に秘要があるとしても、凡て

# 信 仰 相 談

何の藝ごとでも、秘要と名付けて勿體づけるところが味噌であつて、實は秘要を無難作にすれば、學ぶ人の注意力が及ばず上

## 臨終の大事、

## 往生は不定か

### 問

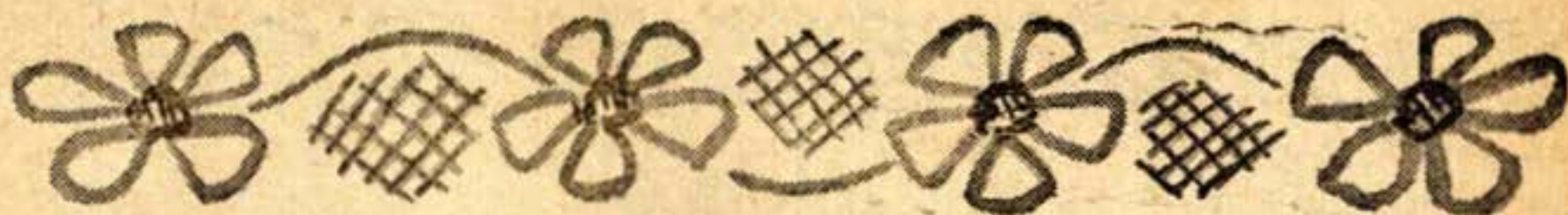
或本に「日頃いみじく念佛の功をつみたりとも臨終に惡縁にもあひ惡心も起り侍らば順次の往生にはづれ生死の流れに苦しまんはいと口惜しき事ぞかし」云云。又曰く「臨終の時迄は一向妄念の凡夫と心得て念佛すれば來迎に預りて蓮臺に乗る時妄念をひるがへして悟りの心とはなれ。妄念の中より申し出したる念佛は濁りにそまぬ蓮の如くして決定往生疑ひなし」とあり無上甚深なる日課口稱の功德は、臨終大事の爲、造惠の凡夫、往生の眞僞定め難し。惡縁襲來せんも

### 答

（千葉・大多喜・竹堂老）  
法然上人の御法語の中に其事をハツキリと云はれて居ます。即ち大胡太郎につかはされた御消息に「まめやかに往生の志ありて彌陀の本願を疑はずして念佛を申さん人は、臨終のわろき事は候まじきなり。そのゆへは佛の來迎し給ふ事はもとより行者の臨終正念のためにて候也。それを心得ぬ人は皆な我が臨終正念にて念佛申したらん時に、佛は迎へ給ふべき也とのみ意えて候は佛の願をも信ぜず、經の

文をも意得ぬ人にて候なり稱讚淨土經には、佛慈悲をもて加へ祐けて心をして亂らしめずと説かれて候へば、たゞの時によくよく申し置きたる念佛に依りて臨終に必ず佛は來迎し給ふべし。佛の來迎し給ふを見奉りて行者正念に住すと申す義にて候。然るにさきの念佛をむなしと思ひなして、よしなく臨終正念をのみ祈る人などの候は、ゆゑしき僻胤にいりたる事にて候也。されば佛の本願を信ぜん人は、かねて臨終を疑ふ心あるべからずとこそおぼえ候へ。唯だ當時申さん念佛をばいよいよ至心に申すべきにて候」云云と仰せられて、本當に如來様の御本願を信じ念佛すれば救はれると固く信じて念佛して居る人には必ず如來様の御來迎があるから、決してたとへ惡縁に遇つても正念になり得

て往生疑ひないと云はれるのです自分の力で正念になるのではなく、如來様の御力で正念にさせて頂くのですから、何んな惡縁が襲來したところで、地獄の猛火、忽ち涼風と化し去つて如來様の懷の中に攝取せられるのです。たとへ「日頃いみじく念佛して」も外見だけで素直に如來様への歸命がないならば、もとより外賢善にして内虛假の者ですから、如來様の御來迎がありません。隨て元の空阿彌の流轉を續けなくてはならないでせう。然るに「一向妄念」の罪惡下劣なるものと心得て「かう云ふ淺ましい者でも如來様の慈願あればこそ」との固い信念の中から申すなれば、たとへ妄念の中の念佛でも至誠のこもつた念佛ですから必ず救はれるのです。此邊をよくよくお味ひ下さい。



# 虚 榮 浮 薄

不動銀行頭取

牧 野 元 次 郎

## 虚榮生活の危険

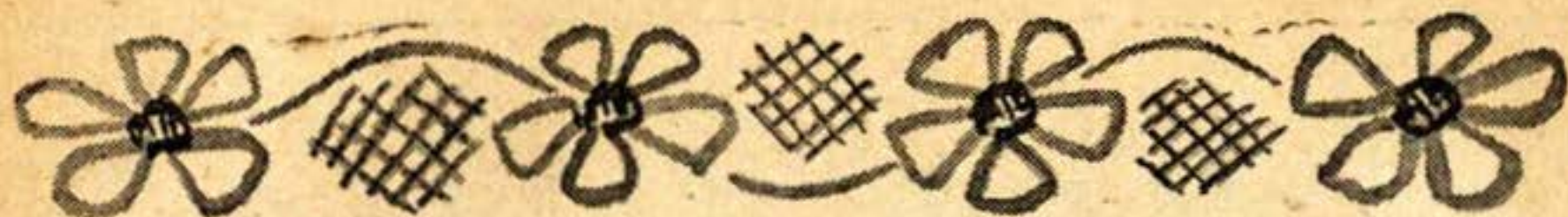
今日の急務は、先づ華を去つて實に就くことである。人の性は兎角華に流れ易い餘程氣を縮めてかゝるにあらざれば、終には虚榮病に取付かるゝものである。取つかるゝと邸宅を立派にしたくなり、自動車にも乗りたくなり、果ては自分の職業をそつちのけにして、銀行や會社の重役は勿論、あらゆる名譽職をも望むやうになる。

虚榮の爲に、徒らに責任の地位を望まれては、其會社銀行若くは公共團體の迷惑は、いかばかりであり、當に其會社の爲め、其銀行の爲め、乃至は其公共團體の爲に、不利益であるばかりでなく、實は其本人の爲にも甚だ不利益である。色

氣を出す仕事は荒む。自分の仕事は自然に不取締となり、發展などは決して望まれぬ。否必ず退歩する。元來仕事なるものは、全精力を盡して初めてドウかカウか行くものである。人任せで甘く行くものでない。又仕事なるものは全く其人にあるのである。手腕もなければ、勉強もしない、又何等抱負もないものが其位置を占めて其業の繁昌すべきものでない。其職責の十分に盡され得るものでない。

## 婦人と虚榮病

體には成るべく餘裕を置き、而して己れの責任ある仕事の大小を十分に消化し得らるゝやうに絶えず用意して置くことが肝腎である。虚榮の爲にあちこち心を使ふやうでは決して



本業に忠實とは言へぬ、親切とは言へぬ。虚榮浮薄は實に人を亦己れをも賊す。戒めざる可らずである。虚榮の人に餘裕なし。心常に多忙、限りなきの慾に向つて、絶えず追ひ行くものゝ如し。盡面苦面寧ろ氣の毒の感に堪へない。此輩は到底ニコ／＼は出来ぬ。四六時中不平煩悶また不快。特に婦人の虚榮病を戒めねばならぬ。値打なき其の身を値打あるやうに見せたがり、婦人にしては感心だとの比較的ホメ言葉に自惚れて、サモ自分はエラサウに感じたり、自分の容貌の美を誇りては容貌以上の或る物を忘れたり、さては容貌萬能主義を振廻して、男子は必ず其脚下に平伏するものと誤解したりするもの、世間甚だ妙からずである。之實に心得違ひの甚だしきもの。婦人の尊きは美貌でない、才氣でない、謙遜にして、内輪にして、貞淑にして、柔順にして、而してニコニコの徳を併せ備ふるものこそ、實に婦人美の極致である。婦人の虚榮病の爲に如何に多くの男子が苦しむかを知れ。

## 家庭不和の基

隠裁ぶる男子は、自分の收入の如何を妻に談るを取ちてサモ澤山の收入ある如き顔をするものがある。是がソモ／＼の

間違である。ソナナに收入があるならば此位の著物を買つて貰つてもいい。ダイヤの指輪も欲しいブラチナの時計も欲しい、芝居も見たい、などと色々の注文が出る。此注文に應じなければ、妻君の御機嫌が悪い。ソコで内々借金しても其望を充すことになる。慾には限りない、注文は澤山になる。終には應じ切れなくなつて、不和を生ずる。財政は火の車、家庭は不圓満、竟には破綻の歎を見るもの、世間決して妙くない。實に其始めが肝腎である。其内情を赤裸々に打ち明けて置きさへすれば如何に女子と小人とは養ひ難しとするも、無茶苦茶に懷疑定もせずねだるものでない。要は男子の體裁ぶるより始まり、終には妻君の虚榮病の爲に斃るゝことになる。あゝ悲惨、憤しむべきは實に此虚榮病。

おぼつかない誰れかいひけん小松とは

雲をさゝふるたかまつの枝

露の身はこゝかしこにてきえぬとも

心はおなじはなのうてなぞ

法然上人詠歌



筆 隨

# 軍 刀

## 一 瀬 直 行

いざとなるとなか／＼手に入らないばかりではなく、非常に高價になるから前々から仕度をしておいてくれと弟から云はれてゐたのだが、求めるのにそれ程困難なことはあるまいと、たかをくくつてゐたところ、いよいよ日を限つて必要となつたら、一本の軍刀を手にするまでにかかりのまごつきと苦勞をしてしまつた。

それまでと云ふもの軍刀なぞは刀劍商の飾窓に出てゐるのを道の行きが／＼にチラツと視野に挟んでも、別に立ちどまつて見ることはなかつた。間違つて古美術の展覽會にでも入つて刀劍が眼に觸れれば、覗いてみてもいやにふんぞりかへつた装ひと、

その背後にひかへる總べての事柄が、その傲慢さが小づら憎く、その上趣味のないところから權勢をのみ見せつけられるやうに考へて、特別の興味も抱かなかつた。

それが一日を争つて必要なことにさし迫るとすつかり慌てゝしまつた。軍刀専門の店や刀劍商をあさつて歩き廻つた。どこへ行つても當時はなかつたし、あつても昔の山賊が腰にはさむやうなとてつもなく大きな刀か、一尺四五寸の役にた／＼ない短い刀よりしか、それも錆びてゐるか、刃がこぼれてゐるかした。正式の軍刀を買ふためには、その時注文しても特別に誂へて一と月以上は待つてもらはなければならぬと、そ

れも斯う云ふ商人特有のどつちが客人かわからぬ手きびしさであつた。

兎も角手に入れなければならぬ。弟と二人して親戚知人手のつくせるだけ手をのばしてみたが、思ふやうなのがなかつた。

あることはあつても二三百圓まで出さなければゆづ／＼とくれない。それだけの金が一瞬に容易に出せるものではない。そして刀劍に全くの素人の、玩具のも本當のものも大いして差をつけておかぬ平常のことゝて呑氣に簡單に考へてゐたら、當人から刀だけはしつかりしたものを持つたゐなければ安心がおけないときいて、このはつきりした當然のことにいま更のやうにおのれの迂闊さに恐れ入つたのである。これ程理屈を絶した言葉はない。喰はれずに喰ひつくす軍刀でなければならぬ。

この困つてゐる時、友の世話で上野に生まつてゐられるその道の大家氏に紹介された。早速弟と連れだつてたづねていつたら立派な二階の廣間に通された。やがて新

しい疊の上におほまかに四本の白鞘がズラリと並べられた。あるところにはあるものと、そのすさまじい盛観に見入つてしまつた。このうちならどれでも保證しますが、と云つて暫らく考へてゐたが、一本を無難作にとり上げ左手で鞘を拂つた。正しく坐り直した膝の上に、ちつと下から見上げてゆく一ふりはみるからにみごとなものだつた。一線白く光るのがあたりを照してゐた。特別にこゝにあるうち好きなのをゆづゝて下さると云ふことであつたが、どれがどういふ風によいのか、又どんなのがどう云ふ風によいのか、さつぱり見當のつかないことであるから、一本づゝ静かにおそるおそる鞘を抜いてみていつたが、皆素晴しく第一鞘を拂つて手にしたものゝ、どうにもこつちの恰好がつかない。中學時分に撃劔をして一度で額に大きな瘤をこしらへこりてしまつてから、こんなことはやるがらではないと止めてしまひ、その後竹刀は大掃除の時疊の埃をたゞく時にのみ見かけた。

だから白鞘を片手に握つて中味を抜いて目の前にさゝげ持つたところで、こんな場合どう見さだめるものか迷つてゐたが、段々と柄を握りしめてゐるうち、不思議と熱っぽい血が身うちをたぎり出してきて、ズバリツと頭上からきり下ろすか、力一ぱい横からはらつてみるかしてみたくなつた。危いッと思つてみると、落ち着いた氏のだみ聲が、これは如何ですか、この中では一番たしかなものと思ひますが、と云つて手渡されたのを見ると、これは又一通りのしろものとしろものが違ふやうに思はれた。先づ光澤は青白くすんでゐてむやみと光らない。鐔のところから全體にかけて柔く反身で双わたりが二尺二寸五分とか。實體をみきはめやうとしても、こつちの肉眼をくらませてしまひ近寄らせないばかりでなく、底光りの凄味をたゞえ、無臭で冷く、非常に軽い。全體に華奢な感じで力で押してゆくより智慧をもつてきりさばく方だ。弟の同意を得てやうやく特別にゆづりう

けてもらふことが出来た。銘は誰であつたか忘れてしまつたが、四百年程前のもので既に人をきつたことがあると云ふ。間に合はないまゝ白鞘の上に外装だけをしてもらひ、勇途についた。その後一年以上たつた今日も、戦地からとゞく弟の寫眞には肌身はなさず必ずこの軍刀がついて廻つてゐる。最近の様子では、きつたと云ふ。やつてくれたかと直ぐ思つた。教養のうちに過敏さを一つのほりとしてゐたあいつが、よくやつてくれたとつくづく思ふ。きれ味は充分であつたと、それも一人や二人に限らないらしい。弟の言葉に、このあたりまへなことが、説明無用とばかりに直接胸に迫つて来るのである。今夜は十一月初旬の満月、うそ寒い夜風に水面がキラ／＼と光つてゐる。クリークと丘を越えたいも煙の敵地の月あかりに弟の仁王だちになつた軍刀が青光つて守つてゐるのが、いま遠くこゝに斯うしてゐても目の前に浮んで消えない。



# 謡曲「上人流」に就いて

松 本 龜 松

謡曲が佛教的色彩を多分にもち、而も淨土宗門の教義が色々の形式によつて、幾多の曲に織込まれて居る事は、餘りにも有名な事實である。そして、開創者たる法然上人の名が「生田敦盛」の中に、

これは黒谷法然上人に仕へ申す者にて候とある事も亦、人のよく知るところである。併し、此の曲では上人を登場人物として居らぬが、上人を建永年中、藤井元彦の名によつて、土佐へ配流した事を扱つた「上人流」の一曲には登場人物としてある。

此の曲は現在廢曲となり、能としては勿論謡曲として謳はれる事がないが、古く「文安田樂能記」に「法然上人」といふ、田樂

の曲名があるのは、此の曲の原曲ではないかといはれ、別名を「源空流」又は「神崎」と稱したなどが知れて居る。但し、作者とか、上演の有無とか、廢曲の年代とかは、一切不詳である。

筋は上人が土佐へ流される途次、攝津國神崎に着いた。すると土地の遊女が舟に棹さして上人をたづね、教を乞ふので、上人は懇に佛法を説き聽かした。ところが此の遊女は現世を思ひ捨て、死を急ぎ、やがて亡霊となつて、再び上人に見え、佛果によつて歌舞の菩薩となり得たと喜ぶのである。

此の筋は配流の上人を乗せた船が、淀河

を下つて室に着いた時、遊君が上人の船に近づき、

誰となくよせては歸る波枕、うきたる舟のあともしめず

と詠んで道をたづねたので、念佛往生の道を授けたといふ、上人の事跡から脚色したものであらうといはれる。

さて、謡曲「上人流」では、先づワキ瀧口何某が上人について出る。作者は貶謫の身の上を、次の様に抒して居る。

唐土の、闇穴道に行く水の、色こそ變れ旅の空、我は花洛を出る身の、濁ると餘處の、人や見ん

闇穴道の事は説明するまでもないと思ふが、楊貴妃の背中に痣がある事を知つた、一行阿闍梨が皇帝の怒にふれて配流される時、通らせられた最悪の道の事である。だから「色こそ」變つて居るが、寂とした旅路だつたにちがひない。龍口何某は所謂「名宣」で、

抑是は土御門の院に仕へ奉る、龍口の何某にて候。又是に御座候御方は、黒谷の法然上人と申して、念佛の行者にたまします、しやへいかくほふ四字のたてばにより、山門の訴訟類なれば、土佐の國へ配流せしむべしとの諭旨により、唯今御供申し候。又かやうの人を流罪には、名を改むなれば、藤井の元彦と號し、梨子打鳥帽子をさせ申し、淀より小舟にのせ申し、只今土佐の國へと急ぎ候。

と事件の經過を説明して居る。ところへ前述の筋で書いた通り遊女が來て上人との問答になり、遊女は

我等かやうなる女人の身も、念佛申さば迎へ給ふべきよなり

とたづねる。と上人は懇にさとしたあとで、

罪と言ひ業と言へるも皆消ゆる、南無阿彌陀佛の聲のうちにて

と一首の和歌を詠む。是で遊女は安心を得て歸るのだが、此の和歌は「釋教玉林和歌集」にある上人のものを借りて來たので、

立歸り浮世の橋をながむれば、渡りしよりもあやうかりけり

と上人自詠といふ和歌を、後ツレの歌舞の菩薩に誦はせて居ると同様、作者の用意よさが窺はれる。そして、キリで

彌陀の功力は、くは、末法萬年の行末諸佛にも捨てられ、十惡といふとも、彌攝すべし。阿の字は十方三世の諸佛、彌の字は一切、諸の菩薩、陀の字は八萬の、聖教といへり。されば無量無遍の功德を集め、阿彌陀とは號すなり。又過去の千佛、現在未來の千佛も、三字に納む

れば、南無阿彌陀佛と一度唱ふれば、三世の諸佛の御名を念ずる功德を、普く衆生に施す

と、シテの言葉に地誦を取交せて、淨土宗門の本義を實に簡易に述べて居る。

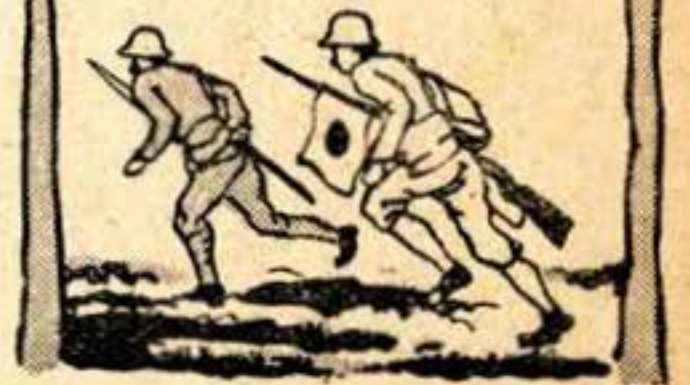
是で歌舞の菩薩は「立ち來る、紫の、雲の波路に御船をりかめ、清風に帆を引き、西方さしてあがらせ給ふ」たので、此の曲を終る事となつてゐる。

能は戯ではないが、所謂近代の宗教劇などくらべると頗る作者の腕のよさと専門家から見たら間違ひがあるかも知れないが簡易に宗門の根本精神にとびこんで居る事を感じるのである。殊にキリの文句に參じてその感を深くするが、是が戯曲となつてゐる事は、此の曲の存在を知つた時から、如何にも惜しい氣がしてゐる。復活は方法さへつけば、いつでも出來ると思ふので、本誌に執筆をする因縁を得て先づその存在を紹介する次第である。

戦線  
餘話

# 信仰の救ひ

吉原 自 覺



この秋、關西方面へ巡回布教に行つたをり、戦線の一兵士が日頃信仰する觀世音菩薩の加護によつて、思ひがけない一命を拾つたといふ話を聞いた。これは偶然とか幸運とかによつて片づけてしまへる話では決してない。信仰の力といふものが、最大の危難に陥つた人間に如何に處すべきかの道を示した生ける教訓として我々の腦裡に刻みつけたと思ふ。

今度の事變が起つてまだ間もない頃の北支戦線。この話の主人公を假にA上等兵として置く。山麓の部落に屯して戦機を伺つてゐた我軍から、或晩A上等兵が選ばれて部下の兵

三名と共に敵狀偵察に赴くことになつた。そこでA上等兵は先頭に立つて見渡す限りの高粱畑の中を走つてゐる一筋路を注意深く進んで行つた。月の明るい夜であつたが、それまでこのへんは大丈夫とされてゐるやうなところで、敵兵からよく不意撃を喰ふことがあつたので用心の上にもなほ用心をして歩きつづけた。そして部落を出て一時間半ぐらゐ経つたであらう。高粱畑が途切れて、山の方へとまた向うの高梁畑へと道が二つに岐れるところへ來た。その山の中腹へんに敵の一團が隠れてゐるらしいといふのが味方の豫想であつた。A上等兵の一行は各々一定の間隔

を保ちながら爪先上りの小徑を進むことになつた。ものの十五分も歩いたときであつたらう。右前方の藪が、ぼつと明るくなつたと思ふと、ドドドツといふ機銃の音が耳を聳くやうに起つた。A上等兵は「伏せ！」と命じると、路傍の雜草の生えた堆い土を楯に、火を吐く藪を睨んだ。四人きりでは下手に應戦もできない。暫くさうして様子をつらうかゞつてゐるうちに、いゝ工合に藪の銃火が止んだ。A上等兵は低い聲で部下の兵の名を呼んだ。三人とも答へがあつたので、まづ安心と伏せの姿勢から立直らうとした瞬間、突然左横の茂みの中から銃聲が起つたのだ。と、鐵兜の下がジーンとした、そこまでは憶えてゐる。——

どれほど經つたか分らない。陽の光が差しこんでゐる。A上等兵は、山かげの百姓家の納屋の中で意識を恢復した。繃帯をぐるぐる巻にした頭が痛む。さうしてA上等兵は自分が捕虜の身となつたことにはじめて氣づいた。さう氣がつくと、無念とも残念とも何とも形容し難い感情が全身に渦巻いて來た。そ

れが陛下の赤子としてまことに申しわけない  
破目に陥つたといふ自責の念に代つたとき、  
A上等兵は直ちに日本軍人らしく、潔く自決  
を計つた。しかし身に拳銃も軍刀も帯びてゐ

ず、そのうへ身體を動かさずしてはじめて  
分かつたのであるが、頭をやられたほかに脊  
中から腰のへんにかけての疼きが到底身動き  
できる状態ではなかつたのだ。A上等兵は齒



をくひしばつたまま、ちつと嚴重に固めた扉  
の方を睨んでゐた。部下の兵が一緒でないと  
ころを見ると、あの時戦死したのかもしれない  
い、それとも無事本隊に戻りついて報告をし  
たのかもしれない、兎に角、かういふ場合に  
自分一人といふことが却つて幸だと思へば  
思へる、——A上等兵は観念すると、身にふ  
りかゝつた境遇を最後まで日本軍人として恥  
ぢない行爲で貫かうと決心した。

翌る朝、A上等兵は敵の隊長のまへに引き  
出された。敵兵の中で日本語の達者な兵卒が  
通譯となつて、いろいろの訊問をしかけて來  
る。勿論A上等兵は一切口を緘する決心であ  
たので、啞のやうに立つてゐるだけだ。二日  
間に五度ほど、かうした訊問と無返答の場面  
があつた。それから拷問がはじまつた。兩手、  
兩足の生爪を剥しにかゝつた——これは支那  
軍の殘忍な拷問の中でも最も苛酷なものだ。  
然し、上等兵は肉體に受ける苦痛が重なれば  
重なるほど、ふしぎに心境の平靜の深まつて  
ゆくのを感じて來た。

かうして二週間間ほど過ぎた。敵はA上等兵の頑強な態度にはほとほと困惑したやうであつた。そして捕虜となつて十六日目の夕方、A上等兵は番兵の一名から明朝は敵と銃殺にされることを聞き知つた。たうと来るところへ来たのだ、彼はこう自分で肯づきながら靜かに運命を待つた。が、一方、これが最後だとなると、敵偵察の重大な任務を帯びながら、それを果し得ずに不覺をとつた自己の不運に口惜し涙の湧くのを覺えずにゐられなかつた。

その夜のことで、眞黒闇の納家牢でうつらうつらしてゐるA上等兵の眼前には故郷の有様ばかりが現はれては消えた。母の姿があつた。村の友人達の姿があつた。日毎に親しんだ畑が、川が、山があつた。それから、母と一緒に朝夕參詣を缺かさなかつた菩提寺の境内にある觀音堂がちらつく。彼は母がさうだつたやうに、自身觀世音菩薩の信仰家であつた。その信仰は、戦線に送られてからも

占領地に觀世音像を見出しては合掌を怠らないやうにさせてゐた。……が、いまや一切が終らうとしてゐる。彼は最後といふとき、せめて日本軍人として「陛下萬歳」を心ゆくまで絶唱させて置きたいものと冀つた。と、急に肩のへんをゆすぶる者がある。A上等兵は眼を開いた。戸口のところに誰か立つてゐる。頭から下まで白衣で包まれてゐる姿が見える。顔は分らない。その誰かが彼にお出でおいでをしてゐる。一瞬、A上等兵は目に見えない力で引き起された。彼はものに憑かれたやうに戸口に走りよつた。扉が開いた。白衣の姿は消えて、そとの軒下では敵の番兵が二人重なり合ふやうな格好で眠りこけてゐる。「生きて、本分を盡せ！」力強い聲が、どこからともなしに聞えた。A上等兵は何ものかに導かれて行くやうに走つた。夢中で走つた。敵陣をどうして突破したのか勿論分らない。氣がつくと山中の森林にもぐりこんでゐた。それから盲目滅法に山を下つて行つた。眼前に人家が見えるにあわてて茂みに身體を隠す。

平地に出ると、高粱畑にとびこむ。方角は一向覺えない。飢ゑも疲れも忘れてゐた。かうして三日三晩、歩きまはつた。そして奇蹟にも、A上等兵は原隊に辿りつくことが出来たのであつた。――

A上等兵は直ちに後方の病院に送られた。彼の診察に當つた軍醫は、この身體で無事歸還し得たことは奇蹟以上だと驚嘆し、その精神力の偉大さを褒め讃へた。

長い病院生活の或日、A上等兵はふと雑誌の口繪で白衣觀音のみ姿に接した。いつまでもそのみ姿を見詰めてゐるうちに、

「あゝさうだ」

と思つた。涙がとめどもなく流れた。彼は佛の慈悲をはじめて知つた。その晩、A上等兵は不自由な右手を使ひながら、故郷の母に便りを書いた。

「……あのときの白衣の方が、觀音様であつたことに、いまはじめて氣が付きしました、云々」

# 從軍記者譚

## 二 橋 新

支那事變が勃發してから、從軍記者達の活躍は戦線が廣大なだけに全く兵士と同じやうな勞苦で、またその活躍も目ざましいものがあり、既に十數名の記者が戦死してゐる。從軍記者は護國の英靈として靖國神社に祭祀さるやうになつた。この際過去の從軍記者に就て知ることゝも無意味でなからう。

### 西南役と犬養毅

日本では、今日のよゝうな意味の從軍記者はまづ明治十年の西南戦

から慶應に學んでゐた。そして時々報知に物を言ひたりして小使を隊いでゐたが、西南戦争が勃發し、戦地から歸つた藤田から或る日、「どうだ、君ひとつ從軍してみな

いか」と言はれ、「ハア、行きます」とあつさり引受けて從軍することになつた。從軍するに就ては、學校を休學しなければならぬが、戦争が終つて歸京した上は、報知でその後の學費を出す條件で、郵便報知から、「戦地探偵人」と言ふ今から見れば、一寸おかしいが、名前を頂戴して丸善で新調の洋服を着込んで、颯爽と東海道を下つたのである。彼が九州に着いた頃は、戦局も進展して官賊兩軍が田原坂の險を狭んで對峙してゐる頃の戦ひ甜な時だつた。ところが、大本營では戦争區域

に軍人と役人以外は入れなかつたので、多くの記者達は通信するに非常に困つた。しかし犬養毅は流石に後世の大政治家たる人物だけにうまく駆け廻つて、某内務書記官の斡旋で「熊本縣臨時御用掛」と言ふ一札をもらつて、自由に活躍することが出來た。そして、名文字の犬養の戦地通信は一躍有名になつた。その通信は明治十年三月廿七日の報知紙上に、「戦地直報」といふ標題で第一報を掲げてから、城山陷落まで百餘面に亘つてゐる。或る時は杉山繁などといふペンネームを用ひた。次に彼の名通信を紹介する。

賊兵鹿兒島に於て一戦の後餘軍を班めて城山に據り、要害の地堅壘を築き一壘毎に僅々數人の哨兵を置き死守す。有限の彈藥なるゆゑ漫りに放たず故に

我兵日々哨線外に徘徊し、往々城山接近の所に至れども嘗て一人も傷けず。但新撰旅團の占據せる米藏へは時々砲銃を發射することあり、蓋し糧米を奪はんと欲するなり。……四圍の官軍晝夜砲撃、死傷鮮からざるに、より當時は大手門上に土室を作り西郷は穴居して終日書を讀み居るといふ。……中央城山を圍みて四方八面より連發する砲彈皆火道を引いて飛來り、紅道萬條數大蜘蛛の碧空に紅網を張るが如く、一所に鐘り一時に裂け、擊電一擊萬雷忽ち落つる景狀は拙筆の能く盡す所にあらず。チヨイと烟火の大仕かけと言はば可ならんかこのやうな彼の名形容は當時としては、中々斬新なものだつたに違ひない。愈々城山が陥落すると犬

養は、

兵を起して以來八月閱日の久しきに彌り、地を略すること五州の廣きに渉る。武も多しと言ふ可し、英雄の末路遂に方向を錯り、屍を原野に曝すと雖も、戊辰の偉功國民誰れか之を記せざらんや。嗟我輩は官軍凱旋の日に歌ひ、國家の舊功臣が死せる日に悲しまざる可らずといふ名文を残して、戦地を引き上げたのだつた。

### 日清戦争と 獨歩と子規

日清戦争の頃になると、新聞の方も非常に發展して來てゐるので、今日のやうな形式で、各社から記者が從軍した。日清ばかりでなく、後の日露の役でもさうであるが、記者として戦線に從軍した

ため、一躍文名をはせ、有名になつた人々が多い。日清の役に從軍した國木田獨歩や、日露の戦に従つた、岡本綺堂、田山花袋等の人達がそれだ。

日清戦争が起ると各新聞から從軍記者が出かけたが、後世有名になつた人々の中で、日銀總裁になつた深井英五、外交界に名をなした古谷久綱、などの人も加つてゐた。後世文名をはせたのは、獨歩、子規等であるが、最も子規は既に當時俳壇に活躍してゐた。

國木田獨歩は當時廿四歳の青年だつた。その頃、彼は麹町の平河町に住つて、民友社に通つてゐたが、可成り經濟的に逼迫してゐたらしかつた。

吾等の貧は大策に貧なり。パンと芋とを食ふのみ、肉一片を食はざる也。徳田氏に書狀を發

し海信委託決行をうながす。

—— 欺かざる記 ——

獨歩が從軍しやうなどと考へたのも、或は貧の爲だつたかも知れない。彼は蘇峰に熱心に從軍のことを依頼して、やつと廣島から許可の通知をうけたのは、明治廿七年十月十三日だつた。通知を受けたその夜直ちに彼は、九時五十分發で、秋雨が降るなかを友人等の萬歳の聲に送られて新橋驛を發つた。

かくて彼は、宇品から佐世保、それから大同江に行つて千代田艦に便乗して海軍に從つた。そして「余が一弟に與へるの書狀」といふ所謂、愛弟通信で文名を知られるに至つた。十月廿四日、獨歩は大同江から上陸した。既に陸軍部隊の上陸した後であつた。この日晴朗、殆んど小春めきた

る天氣なり……上陸して民家に至りぬ。土民委く逃亡して有らず、戯れに豚一頭、家鴨二羽及び婦人用のくつ二足を掠めて歸鑑す……吾今にして婦人用のくつ一個を特に吾が手もて携へたるを悔んで止まず

### —— 欺かざる記 ——

獨歩も血氣の青年であつから、相當鼻いきも荒かつたのであらうか。艦で士官と衝突したりして、急に歸京のことを考へたり、或は懷郷病にかゝつたりなどした。

昨夜は士官次室に於て山路少尉と衝突したり、……

吾威海衛攻撃の後は一と先づ歸京せんかと思ひたり。然れども吾は尙ほ何時までも、社より歸れの報なき限りは、何時までも艦上に留まるべし。告が丁年に達せざる十八九歳の頃長門舟木

の驛に暫らく父母弟と共に住みし事は忘るゝ能はざる所なり。……父と共に秋の小春時、近山慢歩して小松を引きし事あり。父上も尙ほ壯んなりき。今は老朽ちぬ。吾は十一二歳の少年なりき。吾が初戀の少女今は如何。

### —— 欺かざるの記 ——

など、ひどくセンチになつたりしたが、威海衛攻撃が終るまで、彼は頭張つてゐた。彼はよく船中で讀書をしたらしく、ウォールズウォースは愛讀の書だつたらしいのだ、よく日誌に見えてゐる。獨歩の名文章は

甲板に躍り出ずれば、夜は明けんとす！ 東の空を見よ。彼のしのめを見よ、曉星を見よ、嗚呼麗はしき曉天！ 曉霧に眠る劉公島！ 朦朧として水平線上に浮ぶ劉公島、そよそよと吹

き送る朝風、肉も骨も緊る。眞先きに進む旗艦「松島」は朝の衣を着、殿艦「浪速」は未だ夜の幕のうちに在り、見よ！ 戦艦、旗艦の橋上にのぼりぬ。のようにまるで一幅の繪を見る感じである。獨歩は明治廿八年三月東京に歸つた。その年の六月の或る日、佐々木家の從軍記者晝餐招待の席に出席した時、

「マア、貴方が國木田さん？」と佐々木家の美しい令嬢のぶ子に言葉かけられて、喫驚した。のぶ子は彼の愛讀者だつたのだ。そして後に有名な彼の戀のロマンスを咲かすに至つた。

子規もその頃、廿九歳の青年だつたが、彼は既に「小日本」の編輯長をしたりなどして錚々たるものだつたが、「小日本」が都合で廢刊になり、折角獨立したばかりで

またもとの社「日本」に復歸したりなどしてゐた頃なので、彼は非常にいらくしてゐた。そんな不平も手傳つて、「討てやこらせや清國を……」と四千萬同胞の血を湧かした日清戦争が勃發すると、熱情家の彼はちつとしてをれなくなり、病軀を提げて從軍しようとしたのだ。

子規が從軍すると言ふことが判ると、彼の友人や弟子達は、病身の彼の案じて、誰もがその無謀を止めやうとしたが、彼の決心は固かつた。内藤鳴雪が某氏に送つた書簡に

『さて子規の從軍は皆々氣遣ひ、病體にてはと申したれど本人一向聞き入れ不申、此上はとて皆々勇ましくその行を送る事となしたり。行かば我れ筆の花散るところまで』これは出發の際

親許への寫眞に題せしところとなり、決心可知矣」

とあるのをみてその決心の程が判るし、また「小日本」社で机を並べてゐた五百木顯亭が既に召集されて、第五師團に従つて戦地にな

たが、彼に與へた書簡

「皆々にとめられ候へども、雄飛

の心抑へ難く終に出發ときまり

候、生來稀有の快事に有之

候、少生今迄にて最も嬉しき

もの、初めて東京へ出發と定り

し時、初めて從軍と定まりし時

の二度に候……」

これを讀んでも彼の心情が思ひ知

られやう。彼は到頭明治廿八年三

月三日東京を出發して廣島に向

ひ、近衛師團に従軍することにな

つた、從軍許可は三月のうちに

らつたが、中々出發命令がないの

で、彼はひどく心痛して悶々の日

を廣島に過したが、四月七日になつてやつと出發命令が出て、ホツとしたのだつた。

愁眉頓に開け、袋よ、腕よと旅

の支度三日は忽ち暮れぬ

——日記——

輪送船で宇品を出港してから、う

す暗い三等船室の鮎づめの中で病

體の彼は、到底我慢が出来なかつ

たものと見え、待遇を參謀の將校

に談じたりなどしたことが陣中日

記に書かれてある。

道すがらの櫻花桃花紅白に亂れ

て風流ならぬ旅路、さすがに心

残るふしなきにもあらねど、一

たび思ひ定めたる身のたとひ銃

把る武士ならぬとも、再び故國

の春に逢はん事も覺束なければ

行かば我れ筆の花散るところ

まで

出陣や櫻見ながら宇品まで

——陣中日記——

このように覺悟して從軍した彼で

あつたが、子規は不幸にも一發の

銃聲も聞かずに歸國したのであつ

た。彼が旅順から金州へ行つた

頃、既に講和となつたからだ。

五月十日、講和成り萬事休す。

一行七八人金州を辭して柳樹屯

に向ふ。悉く本國に歸らんと

なり。——陣中日記——

しかも彼は歸國の途、發病してし

まつたのだ。子規の心中は想像す

るに餘りある。

十五日、出帆せり、霧深く船遅

し

十七日、朝大なる霧の幾尾とな

く船に沿ふて飛ぶを見る、此時

病起れり

子規は廿二日神戸に上陸したが、

遂に神戸病院に入院してしまつ

た。

日露戦争に従軍した岡本綺堂は

卅三歳の時で、東京日日の記者で

從軍した。第二軍に配屬した。沙

河會戦には戦闘激烈のため、從軍

記者の死傷さへあつたが、彼は小

銃弾で帽子を打ち落されて危機一

發のところであつた。

田山花袋は卅四歳だつた。その

頃彼は既に物を書いてをり、幾つ

かの作品を發表してゐた。彼も第

二軍に私設寫眞員と言ふ名目で從

軍した。當時第二軍にあつた森歐

外に會つたりなどして「花袋君で

すね」など親しい言葉をかけられ

て、彼は全く嬉しくなつた。そし

て歐外と文學を語る光榮の機會を

時々得たのである。彼は卅七年五

月五日に、鹽太堤に上陸して、南

山、得利寺、大石橋、遼陽等の戦

ひに従軍し、九月には歸國した。

陣中  
隨想

## 貴いことである

浄土宗従軍僧 白崎嚴成

それだけでなくさえ、寂しい秋を、死しては護る靖國の神のみ魂をうやうやしく捧げて原隊に還りきた僕。ことさらに寂しい秋だ。

従軍僧——といふ存在は、つまり僕は、その初めは一寸兵隊さんたちに親しみにくいへといふよりもいささは縁起のよくないものの一つとして遠くに敬ひ去られがちであつたけれども、戦もいやが上にもたけなはになればなるだけ、死生を越えた貴い聖戦の大道場に從ふ僧たちにそろ／＼兵隊さんたちは親しみの心を強うしてきた。そこで僕、おもむろに語つて曰

く

「従軍僧は「おんぼ」ではない。君達の活きた「お守り」だゾ」

以上、取りとめのない一聯の縮みであると笑へば笑へ。第一線にある若き若き兵士どもの心境の移り變りを、この一句の裡にお汲みとり願ひたい。

陣中にあつて、「お守」を欣求せらるること、しばしばである。己れひとりの延命の、そのためであらうか？ 然りとせず。従軍僧殿、「お守」をいたゞいておりますと、突撃の時にも、眼にはみえねど、大いなるものの力にソラ進メと押し出される

様で、殊のほか、心も身も軽々しいよろこびがあります。暗夜途に迷ふて憊む時、斥候の重任をおびた自分を、この「お守」が正道に導き給ふかのごとく、眞察判斷を誤ることなしに任務をはたします。とよろこびの心を言葉にかえて僕に伝える。

この若き兵は、いまぞ「同行二人」の妙味を法樂し、「二河白道」の妙境を法悦したといふべきでせう。見逃せば、ささやかな陣中風景の一カットにも「捨身供養」の大戦場には僕達の學ぶべきものは、あまりにも多い。げにあまりにも多い。貴いことではある。

『第二軍從征日記』や從軍から得た作品に、「一兵卒」がある。

過去の從軍記者を憶ふとき、まだ／＼興味あることや、その他の人々もあるであらうしました日本ばかりでなく外國の從軍記者にしても、クリミヤ戦争に從軍したトルストイや、從軍記者の大先輩ワイリアム・ラッセル卿(英國)、米西戦争でサン・ジュアン丘で悲慘な餓死を遂げたフレデリック・レミントン、南亞戦争で片腕を射落されたE・F・ナイト、同戦争でカリキ色に塗りつぶした馬で戦線を駆け廻つたデヨーチ・リンチ、或は世界大戦に大活躍をしたマルヌ戦線ベンの勇士ディック・デヴィス(米國)等の興味津津たる話にもふれたいが、紙数を超過したので、他日稿を改める。(終)

映 画  
物 語

# 鶯

うぐいす

## 東京發聲映畫製作所

原作 伊藤永之介  
脚色 八田 尚之  
監督 豊田 四郎

### 配 役

後 家……………清川 虹子  
そ の 娘……………霧立のぼる  
鶯を賣る女……………堤 眞砂子  
署 長……………勝見庸太郎  
……………藤間 房子  
……………水町 庸子  
……………北澤 彪人  
人事主任三好……………御橋 公  
田舎娘ハル……………文野 朋子



灰色の空が低く垂れ下り、濕地と山嶽と長い冬に包まれ、低い生活様式が傳統的に喰ひ下つてゐる東北、そこには、まだ無智で因循で訥辯で、しかも素朴な生活の斷層がある。

も苦しきうに腰掛けてゐ、その傍に考へあぐんだ而持で座つてゐた老婆は、やがて町の警察の方へ力のない足を引きづつて行つた。

その東北の寂びれ果てた町は、朝夕停車場を通過する急行列車から、小石のやうに默殺されてゐた。街は白々と陽も薄く、人々は年毎に故郷を去つて都會の巨大な坩堝の中に吞み込まれて行つた。

その老婆はキンと云つた。今から二十年も前、養女のヨシエが實母一家に取り上げられ曲馬團に賣られたといふのを、自分の死期が近付いた今日この頃、急に娘戀しく思ひ出しこの警察へ捜査願ひにやつて來たのだつた。

今日も停車場では、この町を離れて北海道に移住する百姓の卵之吉が改札口に立ちほだかつて作の汽車賃を免じてくれと頼み込み待合室の柱の蔭では、水呑百姓の春吉が、周旋屋に身賣りされて行く娘ハルの涙に濡れた頬を拭つてゐた。汚れたベンチには、この町に見馴れぬ風の女が、呼吸使ひ

警察では、丁度百姓姿の母娘が取調べを受けてゐた。事件は五人も婿を取りかへた女と婿いびりで有名な母との間に起つた紛争で、餘り度々婿をとりかへられた娘が輕はづみな狂言泥棒を働いた始末だつたが、しかし、これも云はゞ、貧しさ故にやむにやまれず起つた人間の醜い姿と云はねばならなかつた。

そこへ、停車場で折よくハルを見出した小野崎訓導が、無智な貧農の父親のために身賣りされやうとした教へ子を救ふべく、助力を求めて来た。この事件も度重なることで、今では身賣り防止の救済費も使ひ果してしまつた警察では手の下しやうもなく、ハルは小野崎訓導の好意で前借だけ返してやつと救はれたが、人事主任の三好巡査は、日に日に重い生活の重荷にひしがれて行く彼等の前途を思つて暗い顔をした。

この事件が終ると、三好は、キンのくどくどしい願ひ事を聞き、腹をこわして體の弱つてゐる老婆の歸り行く後姿に慰めの言葉を温くかけるのだつた。

同じ頃、部屋の隅では、八重といふもぐりの産婆が司法主任に調べられてゐた。八重は自分のしてゐることが罪になるとも知らずに

たゞ好意から度々百姓の助産をし貰ふべき謝禮も受けてゐない好人物だつたが、醫師法違反で留置されることになつたのである。

その夜おそく引かれて来たのは、鶏泥棒の多助だつた。多助は女房の病を癒したいばかりに

が、それが近所へ知れて家に居られなくなつたうち、女房が他の男を引き入れた噂を聞いて家に舞ひ戻り、足がついたのだ。



數百羽に及ぶ鶏の盗み先を忘れて係を手古摺らせた多助が、やつと留置場に入れられて間もなく、

泥酔した尺八吹きが検束されて夜更けの留置場を騒がせた。若い頃には腕に覺えのあつたらしいこの男は貧に落ちて町に流れて來てからはすっかり酒浸りになり、遂には子供の葬式料に恵まれた金を酒に費して警察に引つ張られたのだつた。重苦しい一夜が明け朝になつた

町の空家で陣痛を訴へてゐる身持女が運ばれて來た。男達ばかりの警官ではどうにもならず、取調べ中の八重がとりあへず産婦を宿直室へ運んでどうやら安産することが出来たが、昨日停車場で憂ひに沈んでゐたこの姫婦こそ、いまし方赤痢で避病院に擔ぎ込まれた瀕死のキン婆さんが捜し求めてゐたヨシエだつたのだ。三好巡査からキンの話を聞いたヨシエ、産後の體を床から起きうとしたが、それも叶はず、涙に暮れるのであつた。

その頃、警察の門前では、一夜の酔ひも醒め漸く許されて警察を出た尺八吹きが、一管の竹に胸迫る哀しみを托して韓々と人を打つ天來の美音を飄々と吹き鳴すのであつた。急行列車は、今日もこの町を小石のやうに黙殺して、疾風のやうに過ぎ去つて行つた。

婦人淨土



## 悦びの今日此頃

橋本樂榮

春は花秋はもみぢと色そえて

なぐさめたまふ佛なりけり

また逝く秋には心こまやかに色  
づけし木々の紅葉と照り映え、或  
は澄みわたれる大空にかゝやく月

— 頃 此 日 今 の び 悦 —

のかげ、または凡ての醜さを清め  
行く白雪の色など、大自然の中に  
おのづからなる御慈悲のみむねを  
現して、私たち人間生活にいとま  
深き恵みをたれさせ給ひつゝまし  
ます如來様のみ姿に、心から感謝  
を捧げざるを得ないのでございま

す。

唯合掌して南無阿彌陀佛くんと

唱ふるばかりでございます。南無  
阿彌陀佛！。まあ何といふお慕し  
い御名でございませう。

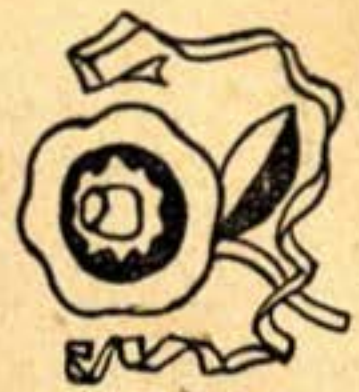
かすくのみのは私達への智  
恵の海であり、あまねき御光は私  
達への豊かな情操の糧でございま  
すもの、朝に感謝のいのりを捧げ、  
夕に反省の涙を以つて洗ひ清めて  
行くこの法悦の日暮しこそ、信ず  
るもののみの知る云ひ知れぬ喜び

で御座いませう。

今こそ生きて行く事の尊さをは  
きりと知らせて頂いて居りま  
す。此の尊い恵みも知らず幾多の  
恩寵をも感ぜず、すべては人意的  
な文化のなす處であり、自然の推  
移であるなどと考へてゐた過去の  
私自身をかへりみます時、何とい  
ふ拙い私でありましたでせう。思  
へば誠に耻かしい限りでございま  
す。

私は初め愚かにも佛教と云ふも  
のは、あきらめを強める消極的な  
宗教だとのみ思ひ込んで居りまし  
たが、圖らずも中村先生の教へを  
受けることになり、色々と御話を  
承りました、めがさめた様にハ  
ツキリと信仰にめざめる事が出来  
ました。そして今更ながらに急に  
周囲が明るくなつてまゐりまし  
た。

一體私はあきらめるといふ事  
を、餘儀なく斷念して其事に對す  
る努力を捨てて了ふ事と思つてゐ  
たのでした。それならば結局物事  
は行き止りになつてしまひます。  
これでは私達社會人は積極的に生  
きて行かれません。だから佛教な  
どは老人のする事だと思つて居た  
のでございます。然し段々承つ  
て見ますと佛教に云ふあきらめ  
は、緣起の理に明らかになる事で  
ございました。ですから周囲の事  
情をよく見きはめて、なすべきを  
なし、訂すべきを訂して公明に正  
大に善處し、今までよりもつとよ  
りよく、より深く自分の生活業務  
を開拓する事でありました。それ  
で御座いますから、行き止り處か、  
どん／＼行先が明るく開けて遂に  
は如來様の大神命の中に、往き生  
きるところの最も尊貴な最も高遠



# 女と着物

高瀬磯

女に一枚の新しい着物ができたとき、たとへその着物が人の前に誇る程の品でなくとも、新しいものに手を通して戸外へ出ることは、女として悦しいものです。

しかし女が新調の着物を身につけたからといって、必ずその着物が、その女自身の好みであるとは限りません。

たまには自分の好みで作ることもありますが、多くの場合買つてくれる人、即ち、親、或ひは、夫の好みのほうが巾をきかせるのです。親は娘に自分のす

きな柄の着物をきせて、人形の如く飾りたてて、眺めて喜んでいます。夫はまた自己の対象物として、自ら好む色合ひのものを着せたがる。

個性がどんどん伸びようとする年頃には、そうした周りの人達の横暴によく逆ひたがるものですが、何時となく年を重ねるうちに馴らされてしまつて、自分を自分の意志で飾るより他人の好みで飾つてしまふのです。自分が着て愉しむのではなく他人に眺められるのです。着物ばかりではありません。

女、それ自體が、親によつて、夫によつて、その好みのままに眺められようとしてゐるのです。しつとりとした縮緬の肌ざわりを無性によるこぶ男もありませうし、びんとした結城のそこ力を尊ぶひともありませう。

女はその相手によつて縮緬にもなれば、結城にもなれるようなのが、男にとつて便利なのです。生糸のままの同化しやすい、個性のないほうが女として却つて伴せなのかも知れません。然しこうした他人の見立てたものばかり身に着けてゐるうちは、女に獨立した、精神的なものなぞ具はつてくることはありません。ぜひ一度は素つ裸になる必要があります。

な意義をもつて居りましたのに、勿體なくもつまらぬものと誤認してゐた譯であります。然し今はもうさういふ誤解はなく、只本當の心からなる歸命があるばかりでございませう。何事も如來様への歸命の中に出来る限りの努力と勇氣とを湧き上がらせて頂き、いよく／＼反省し改善し行ける道を開かして頂いて居るのでございませう。

世の中の上きもあしきもみ佛の我にたまへるみのりなりけりと書いて下すつた中村先生の御歌の通り、如來様のみこころに添ふて、よきにつけてもあしきにつけても、心おこらず又悲しまず、御本願を仰ぎつゝ一心に努力をついて参りたいと念願して居ります。泣きぬれてひとり如來にもの申すこのひとゝきぞ我命なる



# めざめい きむつむ

日常勤行式解説

中村 辨 康

## (二) 三 寶 禮 (教團歸入の法)

一心敬禮 十方法界常住佛  
一心敬禮 十方法界常住法  
一心敬禮 十方法界常住僧

(淨土懺願儀ニ出ヅ)

一心に十方法界常住の佛を敬禮し奉る  
一心に十方法界常住の法を敬禮し奉る  
一心に十方法界常住の僧を敬禮し奉る

(意譯)

眞心を捧げて一心に天地に満ち居たまふて變ることなき御佛を

敬禮致します。

眞心を捧げて一心に天地に満ちて變ることなきみ法を敬禮いたします。

眞心を捧げて一心に天地に満ちて變ることなき眞理を現はし給ふ和合教團を敬禮致します。

### 講 贊

既に香燭を心から誦することに依て、せめてとの願望として、身と心とを淨め、そして其の身と心とを十方三世のみ佛に供養せんとまで思ひ得るやうになつた私達は、云はゞ此處に信仰に入るべき素地を作つて來た譯である。即ち一應田地が培はれ雜草が取り去られたのである。

だから直にも種が蒔かれねばならないのではあるけれども、願

序としてよく地ならしをしなければならぬので、此の三歸依三敬禮を行ふことになつたのである。

之は「南無佛、南無法、南無僧」として釋尊在世當時から佛教に歸入する最も根本的な儀式として行はれたものでもあり、且つ佛教信者の心意氣でもある。

聖道門と云はず淨土門と云はず、凡そ佛教徒である限り此「歸依三寶」の心のない者はない。若し無かつたなら夫は本當の佛教徒ではないのである。畢竟之は佛教の通規であつて、之を知り之を歸敬する事に依て、最早や立派な佛教信者たり得るからである。

されば聖德太子も「十七條憲法」に於て

「篤く三寶を敬へ。三寶とは佛と法と僧となり。即ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か、この法を貴ばざらん。人、尤だ惡しきは鮮し。よく教ふれば、何を以て枉れるを直うせんや」

と仰せられて、國民教育の基本とも遊ばされたのであつた。

然しそれは太子が單に佛教を御信仰遊ばされて居られたからと云ふ理由だけではなく、もつと進んで佛教であらうが無からうが、凡そ人たるものは之の心なくしては、本當の人生を完ふする事が出来ないであり、隨つて國民が之の心を知ることによて一心協力と合の國家を一層美しく堅持して行けると御考へになられたからこそであらうと推察し奉るのである。

即ち「四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か、此法を貴ばざらん」とまで仰せられて居るところを見ても、思ひ半ばに過ぎるのである。

四生とは人間ばかりではなく、一切の生物と云ふことである。即ち化生、濕生、卵生、胎生のあらゆる生物も、畢竟は此三寶に歸入しなければ眞生を得られないから「四生の終歸である」と仰せられたのであり、其生物中の最も尊貴なる人間の住む萬づの國に於ても、國民信念としての「宗」即ち中心たる眞理であるべきとの御見解から「萬國の極宗である」と宣らせ給ふたのであらう。

然し、その太子の「篤敬」と云はれた三寶とは何であらうか。普通云はれて居るところの三寶は、佛像（佛）經卷（法）僧侶（僧）の三であるが、それは住持三寶即ち三寶を具體的に住持し行くものを云つたもので人生教育の原理たるべき眞實の三寶ではない。

眞實の三寶は華嚴經孔目章第二に依れば、佛とは覺の義即ちめざめであり、法は軌法の義即ちいきるところの軌道であり、僧は和合の義即ちむつみ行くところのものであるとして居り、また大乘義章第十に依れば、佛に覺照の義即ち人々を覺醒せしむべき光りとするものを佛寶とし、佛德に可軌の義即ち人々の軌範とすべきものあるを法寶とし、それを信奉するところに無違諍の義即

ちいさかいのすつかり無くなつた状態のものを僧寶として居るが、これ等に依つて見ても「めざめ、いき、むつむ」の三は人間生活の土に無くはならぬ眞實の寶であることが判るのである。

然かも之は天地宇宙に充ち満ちて常に流動しつゝある常恒不變の眞理であつて、何處までも歸依し敬順し行く可きものであるから、たとへ佛教信者であつてもなくても人たる以上遵奉して行くべきものである。

だから佛教が云つて居るからイヤだと云ふやうな偏見があつては斷じてならないのである。眞實なものならば名前などに捉はれて忌み嫌ひするなどは全くつまらないことで、本當によりよく生き本當によりよき世界を造る爲にはそれを取り入れそれを我物としなければ嘘である。

明治天皇の御製の中に

よきを取り惡しきを捨て、外國に

おとらぬ國となすよしもがな

と仰せられてあるが、私達國民も亦た此の御聖旨を奉戴して、よきものならばドンドン取り入れて自分の生活を擴充して行かなければ、陛下の大御心に對し奉つつても申譯のない事である。

然し世には佛教なるが故にと云ふ單なる理由から毛嫌ひして居るものもないではない。

聖德太子の御時代にも名に捉はれて之を嫌つて居たものも若干あつたらしい。

それで太子も

「三寶の妙理、人之を知らず、妄りに異議を生ず云云」と云ふ御言葉もあつたとさへ云ひ傳へられて居る。

之は全くつまらぬ事である。宗教の効用は決して名前ではない。萬人が取つて以て範とするに値ひするものならば、何んなものでも取入れて自分を太らせて行つてよい筈である。

さて、此三寶禮に於ては、最初に「佛」に信順し一心に佛を敬禮するのであるが、其所以は華嚴經に依れば「皆なと一緒に佛の體解せる天地の大道を深く理解して行き詰りなき邁進の精神力を發揮したい」からだと云つて居る。つまり國家社會と共に何處までも何處までもよりよくなつて行きたいと云ふ念願が込められて敬禮するのである。

信仰的に云ふならば「佛の如くありたい」からである。佛の如く、自ら覺めるばかりでなく周圍をも覺醒せしめ、そして覺の行ひを完全圓滿に遂行したいからこそ、其「覺」の完全な體現者を恭敬し禮拜するのである。

私達は決して一人立ちが出来ない。だから何りしても皆なと一緒に覺醒して行かなければならないのは云ふまでもないが、それにしても先づ以て氣付いた自分から始めて行かなくてはならない

から、先づ以て自分を覺醒せしむるやうに念願して行きたいものである。自然界を見れば、一切萬物皆な悉く如來覺醒力の顯現ならざるはないのに、何うして私にはかうも覺醒力がにぶいのであらうかと、其處に反省と懺悔があつてよいと思ふのである。

昔し孔子が魯の國に旅行した時、大きな城墟のある處で一と憩みせられた。其時弟子の子路が

「これは誰の城墟でせうか」

と尋ねた。孔子は

「郭行之と云ふ人の城だつた」

と答へると、子路は

「郭行之とは何う云ふ人だつたでせうか」

と重ねて尋ねた。孔子は微笑しながら

「善を善とし惡を惡とした人だつた」

と云はれるので子路が驚いて

「それはどうもおかしいではありませんか。善を善とし惡を惡とするならば善人だと思はれますのに、其善人が亡びるとは天

理に矛盾して居ると思ひます」

と訝かしさうに質ねるのであつた。

すると孔子は徐ろに

「郭行之は善を善と知つて居たけれども之を行はなかつた。そ

して惡を惡と知つて居たが之を止めることをしなかつた。唯だ

知つて居ると云ふだけでは何にもならない。之を實行するところ

に本當の物がある。だから亡びたのだ」

と教へたと云ふ話がある。私などもさしづめ此の郭行之であつて、其點本當に耻かしい次第である。

だからこそ、もつと果敢な氣持を養はなければ誠に一生を擱に振るものであると反省しつゝ、何しても如來様の前にひれふさねばならぬのである。

また一生懸命に、出来ないながらも因縁ある人に覺醒して頂くやうにと念願して居つても、周囲は中々一向本氣になつては呉れないのである。それも畢竟こちらに覺めが足りないからで、之れ亦た一心に懺悔しつゝ、如來様を合掌し敬禮して行かねばならないことである。此故に少くとも私達にはさうした反省と懺悔とがあつてよいのだから、喜びにつけ悲しみにつけ、人間百事の凡てを覺醒の資とし糧として行きたいと念願し續け得るならば、本當にその人達は尊いのではないからうか。そして此念願あればこそ如來の前に心から敬禮が出来る譯でもあらう。

次に「法に恭敬する」ことも、私達が本當に生きたい念願を持つ限りに於て當然な行爲と云はねばならぬ。

元來「法」は佛をして佛たらしめたものである。いや、佛が佛になつた時、ハッキリと闡明されたものが「佛法」である。だから佛を離れた佛法はない、佛は法主であり、法本であり、法身で

ある。然かもその法は宇宙の眞實相であり、宇宙自然の理法であり天地の大道であるから、天地はそのまゝ十方世界であり、經藏であり、また常住不變の眞理の具現態である。

だから法と云ふものは、法と云ふものだけが特別な姿で天地間にふらついて居るのでなく、一切萬物の中に内在し徧滿しつゝ、具體的には其萬物萬事が進展の相となつて居るのであつて、生き行くこと其ことの中にハッキリ悟り得る原理そのものであるから、形の上から云へば無常即ち進展であり、内容から云へば固定することなきもの即ち無我であるのである。

「緣起を見る者は法を見、法を見るものは佛を見る」

とは釋尊の有名な言葉であるが、その言葉を逆に云へば佛を敬禮し得る者はまた法を敬禮し得る者である。

第三の「僧を敬禮する」とは既に佛を敬禮し佛法を尊信する者に取つて、其具體的な現れとして、其尊き信者の間に流れて居る和やかな親密な雰囲気に対して、心からなる崇敬の念を禁じ得ないであらうことは、敢て多言を要しないであらう。

めざめの根元たる佛力も、進化の原理たる佛法も、事實上に於て、人々をして佛たらしめ、人々の行爲、人々の生活其ものを、本當のものたらしめなくては、本當に力を發揮したとは云へない。

然も佛在世の時ならば、偉大なる佛の人格の力に統一されるか

ら、僧伽たる教團も、宇宙の眞理たる佛法も、素直に自然に充分な働きをなすことが出来る譯であるが、佛滅後の今日に至つては、具體的な佛法としては、僧伽たる教團の「和合」の姿の中にのみ見出されねばならなくなつて居る。

随つてそれは教團人の個々の人々が、其和合を理想とし其親睦を念願とし、常にそれを敬禮し尊嵩しない限り、其中に僧伽の全き姿は顯はれて來ない。たとへ教團の名はあつても、さもない限り生命なき教團に墮ちてしまはないと誰が保證し得るであらう。

「僧中佛あり」

と云ふ言葉さへある位であつて、僧中に佛を顯はすやうに念願し合ふものでなくては、理想的な教團とは決して言へないのである。

然かも私達は既に佛の教團に参加して居るものであるから、朝夕に其念願を披瀝しつゝ、其理想的な姿を「十方世界常住僧」と唱へて敬禮して行きたいものである。

云ふまでもなく和合の中には決して束縛感は起らない。即ちお互ひに譲り合つて居るから「自我主張」の角突合ひは起らないのである。

互ひに生かし合ふ世界！

こんな嬉しい世界はないと思ふ。

若し甲が必要される時、乙丙丁は甲を押し立てるし、また乙が

中心とならねばならぬ時には、甲丙丁は充分に乙を輔佐して行くのである。丙の場合も丁の場合も亦た同様である。

それでよいのである。

互ひに主となり伴となりして、全體の生命を進展させそして完ふさせる世界こそ、本當に幸福な理想的な世界でなければならぬ。

さう云ふ世界が此世ながらの「淨土」でもある。随つて「僧を敬禮する」氣持は本當に「淨土」をあくがれる氣持でもある。さればこそ「大衆を統理して一切無礙である」と經典にも云つて居るのであらう。

之が恭禮三寶の意義であり歸依三寶の氣持である。

無論理念の上には「歸依佛」が中心であるけれども、具體的表現の事實としては最後の「歸依僧」が重大な意義を持つものである。

其上一層淨土教的信念の上からは

十方法界常住佛とは「阿彌陀佛」のことと拜察され

十方法界常住法とは「阿彌陀法」として考へられ

十方法界常住僧とは「阿彌陀僧」として受取られるのである。

何故と云ふに、十方法界は徧滿宇宙のことで「無量光」を意味し、常住は不死不滅のことで「無量壽」を意味して居るから「十方法界常住」とは取りも直さず「無量光壽」で「阿彌陀」となるから

である。

随つて此「三寶禮」は私達淨土門徒の氣持としては

一心敬禮、無量光壽佛（無量光壽の御佛様）

一心敬禮、無量光壽法（無量光壽のみのり）

一心敬禮、無量光壽僧（無量光壽の和合相）

と云ふことになり、結局歸一するところは「南無阿彌陀佛」になつてしまふのである。

法然上人の御眼には何事も「結歸一行三昧」で「南無阿彌陀佛」に見えられたと云ふことであるが、誠に尊いことと今更乍らに感慨の深いものを感じるのである。

私達は初めに香偈の文を唱へて身心を清淨にしたいと念願したが、今は更に一步を進めて、永遠の壽と光との御佛と御法と其教會とを共敬し共禮し行くのである。

かくして私達は信仰への路を一步一步と進んで行くのである。

かうした眞實なる信仰への旅路は誠に長閑であり誠に樂しみ深いものである。

（字解）

敬禮——三種の禮拜がある

一、坐禮（坐つた儘のおちぎで、之に掌を上にして捧ぐる如き思ひですとの、合掌したまゝ低頭するのと二法がある）

講 話

# 一枚起請文

定價 十 錢  
送料 三 錢

二、長跪（兩膝で立ち兩臂を地につけ掌を上にして手頭から先を兩耳の上まで上げる。或はさうしないで合掌したまままで頭を下げるのもある）

三、五體投地（立つて後、兩膝で立ち前の長跪のやうなおちぎをする。即ち兩膝、兩臂、頭の五つが地につくから五體投地と云ふのである。）

法界——天地萬物が單に物として置かれてある丈でなくして常に進化進展して行くものであるから「法界」と云ふのである。大宇宙全體と云ふ意である。

常住——常に安らかに住して居ること、不死、不滅、不變等の意。佛——佛陀即ち覺者（自覺覺他覺行究滿）のこと、和名のほとけは浮圖家（佛陀家）の意味の轉じたるなりと。又は一切の束縛のほどけたる意なりとも云ふことである。

法——達磨は法の原名で色々の意味がある。一切の現象にも名づけ、或は心的對象のみに名づけ、或は道德的なものにも名づけ、或は教説にも名付けなどして、其用途は廣いが、今は私達の救はれて行く教法として見て行きたい。

僧——委しくは僧伽で和合團體のことである。即ち佛を中心として佛法を信奉し實踐して行く教會のことである。

## S.S.S.

金ペンは政府へ！  
ペン先は耐久ペンに  
替へませう

2 エン以上各種

絶對に腐蝕せぬ耐酸ペン

# サエンス・万年筆

# 俳壇

大田 耳動子



行く雲と堤とつり秋の川

娘路市 内海 一 音

評——見方も表現も新らしいと云ふ程でもないが、只何となく大きいと云ふ感じにうたれた、頭のさがる心地がする。俳句とはこんなものかも知れない。此處で若し「堤」が「土手」となつてゐたとしたらどうであらうか。土手のもつ音の響きに、しつくりこないものがあつて、軽いものがあつて、此の句のやうに、どつしりとした感じを與へぬであらう。一寸した所にも注意を惹かぬやうにしたものである。

日向ぼこ犬前に来て坐りけり

東京市 伯 善 悠 雄

評——日向ぼこしてゐる自分の前に犬がやつて来て遠慮もなく座つたと云ふのである。犬は人の迷惑なものは寄つてゐない。水の流るゝやうに自然に行動するだけである。私の家の犬などは、其の上に毛埃りを立てゝ、がり／＼掻きはじめた始末が悪い。作者は犬を此りつける代りに此の句が出来たのである。流石に詩人である。表現の淡々としてをりかな光景である。

雲の出る有難き秋朝な朝な

東京市 堀 澤 全 翁

評——「雲」の句に昔から佳句は少ない。それ程六ヶ敷いもので、俳句に取上げることは殆んど不可能ではない。

かときへ思はれてゐるが、此の句は或る程度まで成功してゐると思ふ。此の句の中で何よりも輝いてゐることは、やむにやまれない眞實の叫びで、之が眞のやうな醜態を補つてあまることがある。世間には作者と何の関りもない漫然とした作りものゝ句が氾濫してゐる。

新宮 奥村 映 太

津 星 茶 月

王子 三野 輪 江 雪

愛知 高 濱 老 杉

東京 鈴 木 白 舟

小樽 中 村 も ん

長岡 見 智

中支 新 田 眞 砂

岡山 山 岡 蟻 虎

廣島 小 堀 邦 吾

傘もちて迎へに來たる夜業かな

大津 別府 菊子

長野 庭下 駄の月影しろく誘はるゝ

朝 鮮 雪 江 八 年 坊

關 島 齋 藤 龍 舟

關 野 川 伯 善 盛 雄

堤防の馬いなゝきてよき夕焼

群 馬 佐 保 太 郎

柿の實の色ありがたき風呂にあり

下 關 中 尾 頑 流

鯛に年をかさねて病つゞく

大 阪 中 木 米 三

金堂の鐸さびたり秋の風

朝 鮮 雪 江 八 年 坊

風にそふ落葉ちろ／＼ちりにけり

尾 道 市 葛 田 竹 郎

山の端を海月かゝる船路かな

青 森 高 松 竹 風

稻架組みて深まる秋の水しづか

明日は征く兄やみの海泳ぎある  
岐 阜 古 澤 照 平  
稻さわぎ案山子のかたの寒げなる  
京 都 な が れ  
白菊の如く生きんと思ひし夜  
東 京 小 池 智 子  
天高く隣り同志の芋掘りに  
石 川 西 村 けん治郎  
稻架かけにくづ折れなむ野菊かな

大阪 吉 廣 夏 生  
花を摘む幼の頬に秋日かな  
富 山 藤 田 四 三 句  
一文字菊の盛りの明治節  
神 戸 森 本 敬 二 郎  
日に映えし柿の一つに秋の空  
滋 賀 重 野 ふ み 子  
此の寺の十夜もすみて風寒し  
山 口 星 出 三 溪  
山門の鬼瓦囀む柘榴かな  
京 都 永 田 七 郎  
まづ耳に那智の瀧音杉木立  
名 古 屋 鷺 津 新 順  
秋雨は續き戦地のしのぼるる  
朝 鮮 雪 江 八 年 坊  
菊咲いて早や十一月となりけり  
小 樽 中 村 茂 舞  
鮮岸の燈臺岬時雨れくる  
大 分 石 堂 柑 山 生  
諸堀の辨當園みうらゝなる  
下 關 關 野 公 孫  
幼な達引く鳴子細切るゝかと  
京 都 福 島 孝 治 郎  
柿の木は赤く開墾地はひろし  
奈 良 久 野 佐 太 郎  
ラクビーの球高々と秋晴るゝ

## 投稿規定

官製はがきに一回二句以内  
とし「淨土」編輯部併送係  
あて送ること

# 立石鉦一氏を中心 に 實業家の信仰座談會

宗祖 立石鉦一氏を中心

## 實業家の信仰座談會

引續き毎月開く筈

宗祖の血を引く立石鉦一氏らを中心  
に、兼ねて信仰を語る座談會  
を開いて佛教徒としての自覺を持

ち度いとの希望があり、本部で準備を進めてゐたが、去る十月五日品川願行寺（本會主事佐藤賢

## 總裁御東上

教化者大會へ

去る十月十六、七兩日芝明照會館及び増上寺で行はれた淨土宗教化者協議大會及び一宗大法要に本會總裁淨土宗管長大僧正郁芳隨園大僧正の御東

上を仰いだ。十六日朝六時東京驛御着、直ちに天機奉伺の後、大會に御臨席、同十七日は増上寺に於ける戰勝祈願、英靈追悼の一宗大法要を御親修遊ばされた。  
御老軀をひつさげての御奮闘に來會者一同感激した。

順師住職）でその第一回座談會を開いた、別項座談會記事記載の通り主催者立石鉦一氏始め加藤氏、大鹽氏、橋本女史、本會側からは中村、佐藤兩師出席、この種の會合としては最初のものであったがしみじみと信仰を語つた良き會合となつていづれも何ものかを握んで散會することが出来

た、これを機會に毎月繼續して聞き度いと云ふ希望が參會者側から出、十二月は十日頃に第二回を開催する筈。  
因みに當日所用のため缺席された坂田良弘師らも次回からは萬難を排して出席される筈で、盛會が餘想される。

## 白衣の勇士を見舞ふ

本會婦人部第三回慰問行

事變が長期に亘るにつれて、白衣の傷病兵を見舞ふ客も次第にうすれてゆく事はなつかはしい事である。然しわれらの爲に一生を不自由に暮さねばならぬかも知れぬこれら勇士に對して、一生涯を慰さめてやるのが、銃後國民の任務でなければならぬ。  
本部婦人部貞恭婦人會では、去

る十一月十一日第三回陸軍病院慰問に出かけた。淨土五百部、其他慰問品を満載した女性軍の集來に白衣の勇士はすつかり感激した。

### 貞恭婦人會例会

十二月三日午後一時より芝公園明照會館に於て來聽歡迎

# 淨き友の會だより

東京本郷白山上美容大學院主橋本榮女史發願の公開信仰座談會は、回を重ねるに従つて、益々堅固なものとなり、會員の結束もつよく、全國同信の集ひの一つの型をつくり出さうとしてゐる。淨土の誌友であり、求道の志淨き者の集ひとして、會員達はこの集ひを、「淨き友の會」と呼びなし、同様の聖なる集會の開催が各地各支部に興り燃え擴らんことを念願してゐるので、願主の希望に基いて、此の欄を設ける運びとなつたから何卒、全國各地にかやうな運動を起しどしく、本欄にその消息を寄せられたい。

## 第三回淨き友の會 中村辨康先生を中心とする同座談會はその第三回を十月十七日午後七時から開いた。會者二十四名。講話は

「念佛の心構へ」なる題下に、第十八願の「至心信樂欲生」といふことから、誠心深心願心の三心の中、特に深心の「信機」から「信法」への轉廻に就て力説せられ、適切な例話など引かれて、求道心の根底たるべき「厭欣心」を説き、最後に求道・入信・修道・體現の信仰進歩の過程が段階的な許りでなく常に繰返されつつ進むものであると、念佛を精進すべきであると結ばれた。座談に入つて、「菩提」「印相」乃至「求道の苦しみ」其他の質問應答の後、身の上話やら淨土誌のことやら、和やかな空氣に語り合ひ、残り惜しく十時二十分頃散會した。

## 第四回座談會 十月廿三日夜七時。三十二名參集。中村先生の講話は、前回に續き、「因縁」に催

れて宗教の門に入つた者の、正しい信仰の進めゆきの道としての五つの正しい行ひ、「五種正行」に就て、讀誦・觀察・禮拜・念佛・讚歎供養と順を追ふて説き進められ、就中念佛の正定業たる重要さを力説された。終つて、座談に入り、「南無阿彌陀佛」の語義、「歸命」の意味、「空」の觀念等の質疑。感謝心無き者への、或る不幸なる婦人への信仰の勧めに就て、又念佛中の忘我的な心境に就て、悩みや惑ひを打明けて指導を仰ぐ等。歸るを忘れて、十時過ぎるまで語らうのであつた。

## 第五回座談會 十月三十日夜。秋深くして六時半より開始。參集廿八名。講話は見惑思惑等、我々の思想や感情、生活乃至信仰上に起る諸々の「煩惱」について一時

間餘話され、後、鳴海要吉氏等會員の希望を汲んで約十分程聲も高く念佛を同稱されて座談に入つた。質疑事項を挙げると、人間といふものの、三界、三惡道、六道輪廻、化和合、五蘊等で次々と活潑なる論議が進められたのであつた。九時半頃散會。尙ほその夜貝多羅葉の經斷片を持參せられし方もあり、佛像の印相に就き一例を以て尋ねられし方もあつた。

## 第六回座談會 十一月六日夜、六時半參集。五種正行の話の補足として、題を「五念門」——禮拜・讚歎・觀察・作願・回向の身口意三業に亘る念の行について、それが三學の展開の上に占める地位、五根五力の思想からの發展としての信と念との意味、佛法僧施戒天の六念思想の意味等を述べつつ説明して行き、この五念門と五種正行との關係について説かれ、一轉してかゝる淨土教の思想が一般佛教の思想上の發展であること

を、教典批判たる「五時教判」の話から經典の思想的發達の頂點

としての阿彌陀佛經典への移行行を跡づけられて、淨土の教への貴さ有難さを高唱された。念佛の後、聖徳太子の「篤敬三寶」、「神」の字義、「涅槃」「門」の意義等質問に従つて話され、尚ほ食物に對する現代人の考、御圖の眞意や姓名判斷への疑、等盡くるを知らず語合ひ、九時半散會。參集廿二名。

會を通じて常に廿數名の變らぬ會員の中には遠く澁谷大森鎌田等の方も多く、臨時には遙々茨城取手邊より來られる熱信者の姿

も見えた。司會は千葉寛定氏。毎回の案内に參會の喜びを願主までたよりせられる方も少くない中には、隠れたる歌人たる願主に態々歌をもつてせられて寄するも見えた。

秋の夜の淨きつどひにわれもまた一心不亂南無阿彌陀佛

(佐藤 淨)

濁り江に人をも身をも沈めしを助け合ふこそ清き世渡り

(石川巳之助)

本願の力にすがりけふもまた事なく過ぎぬ掌を合せけり

(江崎 光好)

## 公 信 仰 座 談 會 案 内

一、日時 來ル十二月 四 日午後六時 (第一日曜) (第九回)

十二月十一日 (第二日曜) (第十回)

十二月十八日 (第三日曜) (第十一回)

一、場所 本郷區東片町七八美容大學院(電車白山上スグッパ)

橋本樂榮方(電話小石川四九七六番)

一、講師 中村辨康先生(講話一時間アト坐談)

## 本 部 だ り

◇「一瀬直行君も愈々文壇の第一線に乗り出した」と本部では今大喜びをしてゐます。同君が「風土」に發表した小説「隣家の人々」が芥川賞の豫選に入つた上、「日本代表小説集」(小山書店發行)に選ばれたのです。同君は本會創立當初から編輯部にあつて活躍され

てゐる人です。それで本會員だけでさゝやかながら同君激勵の會を開いて、今後の奮闘をお願いすることにしたのです。

◇東君からは出征を目前にして益々元氣で教練にいそしんでゐるとのたよりが來ました。會員諸賢にもよろしくとありました。

## 慰 問 寄 贈 者 芳 名 (十月分)

(敬 稱 略)

|     |   |            |       |
|-----|---|------------|-------|
| 一   | 圓 | 大阪市西成區南神合町 | 橋本柳之助 |
| 〃   | 〃 | 朝鮮開教區      | 吉州教會所 |
| 〃   | 〃 | 鳥根縣濱田町     | 朝日町   |
| 〃   | 〃 | 福岡縣湯本町     | 松岡熊太郎 |
| 二   | 圓 | 本郷區駒込蓬萊町   | 鯨岡 恩道 |
| 一   | 圓 | 麴町區麴町一ノ三   | 光源 寺  |
| 〃   | 〃 | 和歌山縣日高郡切目村 | 石川巳之助 |
| 〃   | 〃 | 京都府乙訓郡大原野村 | 村上 養一 |
| 〃   | 〃 | 西宮市        | 齊藤 ゆき |
| 六拾錢 | 〃 | 世田ヶ谷區上馬町   | 岡本 秀華 |
| 一   | 圓 | 中津市諸町      | 菊池春治郎 |
| 〃   | 〃 | 廣島縣加茂郡川上村  | 城 福 寺 |
| 〃   | 〃 | 滋賀縣水口町     | 永 福 寺 |
| 二五  | 圓 | 横濱市        | 小澤 正一 |
| 〃   | 〃 | 濱松市田町      | 小塚伊三郎 |
| 五   | 圓 | 川崎市北加瀬     | 壽 福 寺 |
| 〃   | 〃 | 山口縣岩國町     | 鶴谷 熊藏 |

(以上十一月十日マデ)

十一月號正誤

五七頁下段六行難波英受は、難波英定扱の誤

同七行神奈川教區は、神奈川教區小田原組寺院の誤

五六頁下版四行目爾樽教區江久組の次に常願寺を入れる

## 編輯部だより

◆十二月號の編輯を了へて、おやもう第四巻もこれですんだのか一年位いの月日は、毎度の言ひ草であるが、全く夢のやうである。尤もまだ十一月の月中で、本當の暮はまだ一月先にあるとは云へ、また大して爲すことも無き一年を終へて仕舞ふのかと云ふ氣持は甚だ深刻なものがある。が、眼を一度社會の變轉の中に注ぐならば、私個人の生活とはまたなんとかけはなれた、素晴らしい躍進轉換が、この一年の中に行はれた事か！

◆事變の經過は皇軍の比類なき勇戦の中に電光石火の如く進展して、長期建設のスローガンが高く叫ばれてゐる。内外の諸經營は愈々多事であつて、國民の自覺を促すこと愈々急である。私一個人の咏嘆の如き何ものぞである。

◆この逢ひがたき時代に生れ合せて我らは、一層信仰の深きに努めて、時代の佛教徒たる役割を果さねばならないのである。光陰の短かきことを徒らに嘆ずる勿れと自分自らに云ひ聞かせたのである。

◆今月の巻頭には不動銀行頭取牧野元次郎氏に書いて頂いた。氏は金融界にあつて、信念と實行の人。

◆「社會と佛教を語る座談會」は祖宗の末裔立石氏を圍んで、品川願行寺に於いて開かれた信仰の集ひが、聞きずてにするには餘りに惜しい會合であつたので、その一部を採つたものであるが、今後もこの種の記事をなると載せるやうにしたいと思つてゐます。

◆隨筆「軍刀」を寄せた一瀬直行君は本會の編輯部にある人、芥川賞の豫選に入つて、目下各雑誌に小説を發表せられてゐる新進の小説家である。

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様願ひします。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ります。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で御願ひします。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから、廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひします。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目  
電話代表銀座 五七六六

淨土 十二月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和十三年十二月三十日印刷納本  
昭和十三年十二月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順  
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町二ノ二  
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内  
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢  
(送料五厘)

一ケ年 金一圓  
(送料不要)

我が信仰

|       |      |       |        |      |
|-------|------|-------|--------|------|
| 知恩院   | 本願   | 懺悔    | 念佛     | 往生   |
| 岡本かの子 | 佐藤春夫 | 吉田絃二郎 | 武者小路實篤 | 郁芳隨圓 |

文壇の巨星が語る信仰の體驗！

四六判二色刷表紙付  
定價六錢（送料三錢）  
二十部以上一時に購入  
の方には一部五錢とす。  
法然上人鑽仰會編

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨

頂は？  
法然上人は？  
文壇の巨星

が隨筆風に表現された、新鮮な信仰

の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを

點ぜずにはおかない！

この内容、この定價！本書こそ布

教用書の最高峰を行くものである！

會仰鑽人上然法・所行發

振東 替京 東芝 東京 二八 一八 七八 館會 照明 團公

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和十三年十一月廿日印刷納本 昭和十三年十二月一日發行

淨

土 第四卷 第十二號

定價金十錢  
（送料五厘）  
滿鮮臺等  
外也定價金十一錢